
とある幻想殺しと万華鏡写輪眼

あ・・・ありえん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある幻想殺しと万華鏡写輪眼

【Nコード】

N7665W

【作者名】

あ・・・ありえん

【あらすじ】

弟サスケのために死んだイタチがとあるの世界に転生して上条さんと「一緒に活躍する」という話。ちなみにイタチは死んだけど永遠の万華鏡写輪眼所持です。

なぜかって？こうでもしなきゃ一方通行とか右席とかに勝てないと思ったからだよ！！まあ一応永遠の万華鏡手に入れた理由は話の途中で明らかにする予定ですのでご安心を。それと原作通りだけど少し変わります。

永遠の万華鏡とかふざけるなという人や原作に沿ってないとやだと

言う人は見ないことをお勧めします。それでもいいよっていう方はどうぞ。後それと小説を書くのは初めてなので少し変なところもあるかもしれませんがその所はご勘弁願います。
お気に入り登録数100突破！！
これからも頑張って書いていきます。

プロローグ

うちのはアジトでは因縁を持つ二人の兄弟が命を掛けて闘っていた。一人の名はうちはイタチもう一人の名はうちはサスケ。

サスケはイタチによって虐殺された一族全員の恨みを背負ってイタチと闘っていた。

そしてその闘いの幕が降りようとしていた。

「俺の眼だ・・・俺の光。」

もはや満身創痍で歩く事で精一杯のイタチはまるで屍のようにサスケに近づいていた。

「やめろお!!」

チャクラをすべて使い果たして反抗することが出来ないサスケはこう叫ぶことしか出来なかった。

しばらくしてサスケの目の前についたイタチは目をもぎ取るような形でサスケの左目に突き当てると

「許せサスケ・・・・・・・・・・これで最後だ・・・・。」

・・・・・・・・こんな兄で・・・・すま・・・・なか・・・・・・・・つ・・・・
・・た・・・・・・・・な

そう言ったイタチは意識が無くなりその場に倒れ込んだ。

そう、イタチは死んだのだ。

そしてその断絶は永久に続くと思われた。

しかし・・・・

第一の巻 学園都市

ここは学園都市

なんで記憶だ暗記術という名目で超能力研究即脳の開発を行っている都市。

その目的は、人間を超えた身体を手にすることで神様の答えにたどりつくことだとか。

大勢の学生を集めて授業の一環として脳の開発を行っており、学生の数は総人口の8割に及ぶ。

学校や学生寮などの数も半端ではなく、教育機関を中心とした造りから学園都市と呼ばれている。

東京西部を一気に開発して作り出され、一部を神奈川や埼玉に及ばせながら東京都の中央三分の一を円形に占めている。

内部は二三の学区に分かれていて、学区ごとに特徴がある。

総括理事長はアレイスター・クロウリー。

運営は十二名の学園都市統括理事会が行う。

開発以外の科学技術もぶっ飛んでおり、最先端の技術を実験的に実用化・運用しているため、外よりも数十年分ぐらい文明が進んでいるらしい。

そしてその学園都市第17学区のとある学生寮で一人の少年がのんびりと朝を過ごしていた。

「はあ……不幸すぎる。昨日はひどい目にあっただぜ。

まあ今日は天気も良いし、気持ちを入れ替えて布団でも干しておくかって、あれ？もう干してある？」

少年が布団を干そうと外を見ると白い服を来たシスターらしき女の子と黒い赤い雲の模様が描かれた服着た青年が引っかかっていた。

「え？ え？ ええーっ！？ おん・・・なのこ？ この服シスターさんか？」

外国人、だよな？ そしてこっちの人は、見慣れない格好だな。でも一応日本人みたいだ。」

少年は目の前の出来事に焦りながら呟いた。

「おなかへった。

ねえ、おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな。」

白い服を着たシスターが呟いた。

「お前・・・名前は？」

「インデックスっていうんだよ。よろしくね？」

「へー、名前はインデックスって・・・目次かお前は！！？」

「ぐぐ・・・ここは・・・一体？・・・」

うめき声を上げながら黒い服を着た青年が目を覚ましたようだ。

「あつちの人もやつと目覚めたか。あのーすいません。」

「何だ？」

「あなたのお名前は？」

「・・・うちはイタチ。」

「こっちの人はあっちと比べたらまとものようだな。」

「????」

「ちょっと・・・それはどういう意味かな？」

「名前がインデックスって誰がどう聞いてもふざけてんだろ!!」

「なっ!ふざけてないもん!!ちゃんとした名前だもん!!」

「ハイハイソウデスネ。」

「それはなんとなく私を馬鹿にしているね？」

「おい。」

「はいなんでしょうか？」

「すまんがそこに入れて欲しいのだが。」

「はあ、どうぞ。」

少年がそう言った後に中へ戻ろうとした時、床に滑って豪快に転んだ。

そしてベチャと言う音をたてながらちょうど真下にあったホットドッグを背中を押しつぶした。

「くそ・・・今日も不幸な日が続きそうだ・・・。」

少年は半泣き状態で悲しそうに呟いた。

「それでお二人はどういう事情であんな所にいたんでせうか？」

少年はイタチとインデックスに尋ねた。

「実は俺にもさっぱり分からん。死んだはずなのになぜかあそこにいた。」

「え？死んだってどういうことですか？」

「悪いが君には話せない。」

「はあ、そうですか」

「ついでだがここはどこなんだ？」

「えっ？学園都市ですけど。」

「学園都市？聞いたこともないな。」

「えーっと学園都市というのはですね……。」

少年は学園都市について知っていることを全てイタチに話した。ついでに自分の名前も教えておいた。

「とまあ俺が知っているのはこれだけなんだ。悪いな。」

「気にするな大体は理解した。」

「そうか。でお前はどんなんだ？」

「私は追われていたから飛び移ろうとして失敗したからあそこにいたんだよ。」

「追われてるって誰に？」

「魔術結社だよ。私が持つ十万三千冊の魔道書のためにね」

さっきまでとは雰囲気がかわったインデックスはそう呟いた。そしてさっきまで普通の顔をしていたイタチは急に真剣な顔になった。

「はあ？魔道書？魔術結社？そんなもん信じられるかよ。」

「なっ、魔術は存在するもん！！。」

インデックスは慌てながら言った。

「インデックスといったか？ならば君の出来る魔術を見せてもらおうか。」

話はそれからだ。」

「そ。そうだ。なら魔術とやらを見せてみるよ。」

イタチと上条は少し興味を持ったような表情で見つめた。しかし……

「うつ・・・実は私魔力がないから魔術が使えないんだ・・・。」

インデックスはそう答えた。

「おいおい使えないなら魔術があるかどうかなんて分からないじゃないか。」

上条は呆れた様に呟いた。

隣にいたイタチも少しだけ疑いの表情を見せた。

「魔術は・・・あるんだよ。」

インデックスはいじけながら言った。

上条はダメだこいつと思いつつ見えていた。

「思い出した、私には歩く教会と言う究極防御魔術がかけられてる服があるんだよ。」

「防御術？それは万華鏡の瞳術須佐ノ乎の様なものか？」

「まんげきよう？すさのお？なにそれ？」

二人はキョトンとした顔でイタチに言った。

「忍術も知らんのか？割と当たり前だと思っていたが・・・。」

「ああもう魔術だの忍術だのもう訳が分かんなくなってきた。」

上条は頭をかきながら叫んだ。

「信じられないのなら・・・見せてやろう。」

イタチは印を結びインデックスに向かって火を吹いた。
普通ならインデックスは火傷をするところだが無傷だった。

「えっ・・・！？何今の・・・？」

上条は口をポカンと空けながら呟いた。

「・・・君の言ってた防御術は本当のようだな。」

「ふん！当然なんだよ！」

インデックスは偉そうな感じで呟いた。

「え！？ちょっと上条さんには訳が分からなかったんですが・・・。」

「今のが忍術だ。」

「まあ確かに口から火を吹いてはいましたけど。ていうかなんで手を色々組み合わせていたんですか？」

「これは印と言うものだ。簡単に言えば術を発動するときのトリガーとなるものだ。ちなみにこの子を狙ったのは忍術の有無を認めさせるためと魔術があるのか確かめるためだ。」

「なるほど・・・そしてこのシスターの言うことが本当だったと・・・。」

「これで魔術は認めてくれるかな？」

「はいはい認めますよ。」

「あーそうそう俺にも生まれついた時から変な能力を持っているんだよな。」

「どんなの？」

「異能の力など神の奇跡とか何でも打ち消すこの右手さ。」

「え・・・神の奇跡。ブツｗｗ！！」

「な、何がおかしい！！怪しい通販を見てるような反応しやがって！！」

「だってさ、神様を信じてない人に神様の奇跡を打ち消せますって言われてもねえ。」

「クソっ、ムカツク。こんなイカサマ少女に馬鹿にされるとは・・・」

「イカサマじゃないもん。なんなら試してみる？」

「何をだ？」

「さっきも言ったけどこの服には防御魔術が掛かってるよね。なんなら君の右手でこの服を触れてみてよ。」

「えっ？それってやばくないか？」

「それはつまり君の言ってることが嘘だと認めるわけだねw？」

「おもしれえ・・・そこまで言うのなら確かめてやろうじゃないか
ああ！！！」

挑発に乗った上条はインデックスの服に勢い良く触れた。

するとインデックスの着ていた服がビリっと言う音をたてながら無残に敗れた。

「い・・・いやあああああーーーー！！！！！！！！！」

インデックスは上条に向かって噛み付こうとした。

しかし、その前にイタチの手刀を喰らってその場に気絶した。

そしてインデックスを毛布でくるんでベッドに放り投げた。

ここまでに費やした時間約3秒。

「あのーイタチさん・・・。」

「・・・なんだ？」

「女性の裸を見てなんとも思わないのですか？」

「別に・・・。」

「・・・それでどうします？この子？」

「問題ない少しすればすぐに目覚める。」

「だいいいのですが・・・。」

「それはそうと頼みがある。」

「なんでしょうか？」

「忍具の手入れをしたいのだが少しの間だけここにいさしてくれ。」

「そんな水臭いこと言わずにずっとここにいろよ。どうせ行く宛がないんだろ」

「・・・大丈夫なのか？」

「フフン、一人や二人増えたところで上条さんには何の問題もありませんよ。」

「そうか・・・すまないな。」

「なーに困ったときはお互い様だぜ。」

「フツ・・・そうだな。ではしばらく世話になる。」

イタチは笑いながら呟いた。

「あつ、いけねええ！！今日が特売セールだと言っのを忘れてた！！！！」

「・・・それは重大な事か？」

「重要どころか超重要ですよ！！これに行かないと今日の夕食は抜きになります。」

「そうか・・・それは残念だな。」

「なんですかそのどうでもいいですよみたいなセリフは!!!!。」

「俺は忍びだ、任務によつては何日以上もかかるときだつてある。」

「そういう事になつても大丈夫なように普段から長期保存出来る食料は持ち歩いているものだ。」

「で、今はどれくらい溜め込んでいるのですか?」

イタチは懷を探り始めた。

しかし数分立つても食料は出てこず、クナイや手裏剣や起爆札や口寄せの巻物などの忍具が大量に出てくるだけだった。

そして部しばらくした後に立ち上がり

「・・・やはり俺も当麻君に付いていく事にしよう。」

それを聞いた上条は盛大にずっこけた。

「結局食料は出てこなかったんですか!!!!?」

なんだかんだ言つて二人は特売セールがやっているスーパーへ行くことにした。

そしてイタチの烏分身により上条達は普段の3倍の食料を手に入れることに成功した。

「完全下校時刻を過ぎています。学生の皆さんは速やかに帰宅してください。」

「意外とあっさり取れたな。」

「忍術ってほんと便利だな……。チートだろ……。」

一日になんとも不思議なことが起きたせいか上条の頭の中はてんわあんやになっていた。しかも重度の。

「どうした？もう寮に着いたぞ。」

「はあ……。そうですか……。」

「元気がないな。」

「……。ほつといてください。」

二人がしばらく歩いて上条の部屋の近くに来ると。清掃ロボットが部屋の前をうろちよろしていた。

「当麻君あれはなんだ？」

「あれは清掃ロボットって名前の通り清掃するロボットですよ。

ていうかなんで人の部屋の目の前にいるんだ？ってあれ……。インデックス？」

上条はインデックスの元に歩み寄った。
インデックスを抱えてみると背中あたりから大出血していた。

「しっかりしろインデックス！！どこの誰にやられた！！？」

上条はかなり焦っていた。

「そこに隠れている奴・・・そろそろ出てきたらどうだ？」

「えっ！？」

「おやおや、バレてたみたいだね。」

物陰から身長2メートル超えて赤毛の神父のような男が出てきた。

「てめえ、一体何者だ！！？。」

「僕たち・・・」

魔術師だけど？

第一の巻 学園都市（後書き）

いかがでしょうか？

自分的にはなんかイマイチのような気がしますが多分大丈夫だと思う・・・。

2話は明後日か明後後日に投稿する予定です。

第二の巻 炎の魔術師

魔術師・・・今そこに立っている赤毛の男はそう告げた。

イタチは冷静でいたが上条の方は少しだけ体が震えていた。

「やはりそうか・・・」

この言葉を聞いた赤毛の男は少しだけ気になったような雰囲気です。
イタチを向いた。

「やはりというのは・・・どういうことかな？」

「数時間前にこの子の事を調べた時に手に入れた情報を元にしてだ・
・・・」

「何？」

「この子は10万3千冊の魔道書を持つてると告げた。
俺も最初はイカサマだと思ったが・・・」

イタチはここで目をつぶり、1秒ぐらいした後再び目を開いた。
その目を見た赤毛の男は表情を変えた。

「その赤い瞳・・・貴様一体何者だ」

赤い瞳、イタチは写輪眼を発動した。

「あなたが知る必要はない・・・」

さて、本題に戻すがこの眼で見透かしてみたらある程度の事は理解

した……。」

ここでイタチのかわす空気が変わった。
そしてイタチは写輪眼で見透かした事を全て打ち明けようとした。

「この子は10万三千冊の魔道書とやらを持っているのではない・
この子は膨大な魔術とやらの文献を記録して保管する図書館のよう
な存在だ。」

「!!!!」

この言葉を聞いた赤毛の男は度肝を抜かれたような表情をした。

「えっ!?それって・・・どうということなんだ・・・?」

頭の中が混乱している上条はイタチに尋ねた。

「そう慌てるな。わかりやすくゆっくり説明してやry。」

るといいかけたイタチだが、いきなり火が彼のとなりを通過した。
火を放ったのはどうやら赤毛の男のようだ。

しかしその顔はかなり焦っているようだった。

「君は秘密を知りすぎた。悪いけど死んでもらう。」

「勝手な言い草だな。あなたの気持ちも分からなくはないが・・・。」

「最後に一つだけ聞いておきたい・・・。」

「なんです?。」

「どうして僕が魔術師だと分かった。」

「さっき言っただ・・・、この子を調べたと。魔道書のついでに魔術師の力の源などを見切った。そこから先はあなたの判断にお任せする。」

「・・・なるほど、そういうことか。」

そう言う赤毛の男は煙草をベランダの下に向かって吐き捨てた。吐き捨てられた煙草から炎が勢いよく吹き出した。吹き出された炎は徐々に赤毛の男の掌に集まっていた。

「僕の名はステイル・マグヌス。」

と・・・言いたい所だけどここは「Fortiss931」と名乗っておこう。」

「?。」

「魔法名だよ。日本語では強者と言う意味さ。だけど本当は魔術使うときに魔法名を言っではいけないんだよね。古臭いしきたりだから僕には理解できないけど。重要なのは魔法名を名乗り上げた事だね。」

僕たちの間ではむしろ 「殺し名」 かな。」

「短くまとめると俺を殺すと言う意味ですか?。」

「まあ、そう解釈してくれて構わないよ。」

両者の間には口では言い表せないほどの殺気で覆われていた。

「当麻君……。」

「なんだ!？」

イタチは懷から薬を上条に向かって投げた。
すかさず上条はそれをキャッチした。

「これって……。」

「その子を連れてどこかへ行け……。」

「え、でも。」

「時間がない。早く手当しないと手遅れなる。ここは俺に任せろ。」

「ぐ……。分かった。でも死ぬなよイタチさん!!」

「フツ……。まだまだこんな所で死ぬつもりはない……。」

物静かにそう呟いた。

そう言った後に上条は右手が触れないようにインデックスを抱えて
その場を去った。

上条の気配が消えたのを確認したイタチは戦闘体制に入った。

「君ね……。たった一人で僕に勝てると思ってるようだけど……
すぐにその考え改めさせてあげるよ!!」

炎を充分溜め込んだステイルはその手をイタチに向けた。

「巨人に苦痛の贈り物！！」

掛け声と共に鞭のような形状をした炎をイタチ目掛けて放った。

イタチの立っている場所に爆発が起きた。

その衝撃で地面が削れとなりの扉などが吹き飛んだ。

辺には煙がモクモクとさまよっていた。

「ふう、やりすぎたかな・・・？残念だったね。

まあその程度じゃ何回やつても僕には勝てなry」

「後ろがから空きですよ・・・。」

何？と言いながらステイルは後ろに振り向いた。

そこには本来なら死体になってるか灰になって跡形もなく消え去ってるハズの

イタチが立っていた。

「その程度の威力で俺を殺すとは・・・。舐められたものだな・・・。」

かわしたと言うのか？だが移動するときの動きが全然見えなかったぞ！？

とステイルは頭の中で呟いていた。

「今度はこちらから行かせてもらいますよ。」

イタチは手裏剣やクナイをステイルに向かって投げた。
ステイルはそれに対して炎の魔術で手裏剣を溶かした。

溶かし終えた瞬間を狙ってイタチは超スピードでステイルに近づき、ステイルの腹めがけて蹴りをくらわせた。蹴りを喰らったステイルは5メートルくらい吹っ飛んだ。

「グハツ!!」

ダメージが大きかったのか、そのせいか口から唾を吐き出した。

「無様だな……。」

そう言われたステイルは犬のような呻き声を出しながらイタチを睨みつけていた。

「その程度じゃ何回やつても勝てないよと言うセリフ……。そのままお返ししよう。」

ステイルはずっと黙り込んでいた。そしてしばらくすると

「世界を構築する五大元素の一つ……。」

「？」

ステイルが何か呪文のようなものを唱え始めた瞬間、炎が周りを覆い尽くすように出現した。

「……これは？」

「偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

その名は炎、その役は剣

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！！」

もの凄い轟音をたてながら巨大な炎の竜巻が出現し、その熱波でドアの取っ手や金属で出来た手すりを溶かしていった。

やがて竜巻は人の形をかたどっていった。

その見た目はまるで火あぶりで弾圧されている人のようだ。

「魔女狩りの王イノケンティウス・・・その意味は「必ず殺す」

」

イノケンティウスはイタチめがけて襲いかかってきた。

イタチはすぐさま印を結び、水遁・水陣壁で身を守ろうとした。

しかしその水はあっさりと蒸発してしまい、イノケンティウスの攻撃をまともに

喰らってしまった。

攻撃を喰らったイタチは数メートルぐらい吹っ飛んだ。

そしてその場にずっと倒れたまま微動だにしなかった。

イタチ着ていた暁の衣はボロボロで所々に大火傷のあとが見られた。

「惜しかったね。イノケンティウスは撰氏三千度の炎の塊。

その程度の水じゃイノケンティウスは消せない。

仮に消せたとしてもいくらでも再生する。

とはいえ・・・僕の切り札を使わせるとは大したものだよ。君は。」

この勝負スタイルの勝ち、

誰もがそう思っていたが・・・

ボンッ！！

「何！？」

ステイルは驚いた、これが意味しているのは死んだと思われるイタチが突然
煙を上げながら破裂したからだ。

「くっ……身代わりか。」

ステイルは齒ぎしりをしながらつつ立っていた。
その頃イタチは気づかれないように写輪眼でイノケンティウスを観察していた。

イノケンティウスのカラクリを見破るために。

「……なるほどな、そういう事か。」

何かに気づいたイタチはこの場を立ち去った。
もちろん気づかれないように。
そしてステイル達から離れたある場所にやってきた。

「こいつが炎の化け物の口寄せを制御する札のような物か。」

そこにはテープで止められた紙が無数に張り巡らされていた。
そしてその紙には謎の文字が刻まれていた。

「こいつを全部はがすのには時間があるな……。
なにか手っ取り早い方法は……ん？」

上を見上げると火災探知機のようなものがたくさんついていた。

それを見たイタチは何かひらめいたのか探知機にギリギリで当たらないように

火遁の術を放った。

すると探知機の中から水が雨のように降り注いだ。

その水の影響によってテープで止められた紙は剥がれ落ちていった。それを確認したイタチは再びステイルの元へ向かった。

「くそっ・・・火災探知機か！こんな時に！」

「さて・・・そろそろ終わりにしましょうか。」

「何っ!？」

後ろを振り向くとイタチが立っていた。

「イノケンティウスはどうしたんだ!？」

「今頃粉微塵に消え去っているだろう。」

「消え去っているだと？、フッフ・・・あのねさつきも言っただけどイノケンティウスは摂氏3千度の炎の塊なんだよ？この程度の水じ

や全然効かないよ。」

「自分の術の弱点も分らないのか？」

「何？」

「お前は紙に変な記号を書いてテープであちこちにとめていた。だがこうすることで紙は剥がれ落ち、そして紙に書かれた記号も水に濡れることによってばやけやがては溶けていく。そんな事も分らないのか？」

「う・・・嘘だ。そんな理由で僕がイノケンティウスが消えるはずがない！！」

「ならなぜ、炎の化け物はやってこない？」

「はっ！！」

「さて、さっきも言ったはずだ・・・。」

イタチは超スピードでスタイルに近づき、みぞおちに拳を打ち込んだ。

「もう終わりにすると。」

ウツ！と言う声をあげながらスタイルは倒れ込んだ。
気絶したことを確認すると瞬身の術で上条の後を追った。

「くそっ・・・しっかりしろよ。」

イタチに薬をもらって来た上条はひたすらインデックスの看病していた。

しかしインデックスは依然として意識がない。
そこへイタチが現れた。

「あいつは？」

「たったさっきケリを着けてきた。それで、そっちはどうだ？」

「一応血は止まったけどまだ意識がない。」

「・・・そうか。」

「このまま病院へ運びたいけど問題があるんだ。」

「何だ？」

「こいつ・・・ここのID持っていないんだ。」

IDをもつてないと不法侵入者として扱われるんだ。
下手をしたらイタチさんまで侵入者扱いだ。」

「ならどうする？言つとくが俺は医療忍術の心得はないぞ。」

「くそ・・・どうすりゃいい。」

二人が黙り込んでいる間にインデックスが目覚めた。

「とうま いたち どうしたの？」

「お前、目が覚めたのか？」

「とうま顔色悪いよ。」

「人のこと心配してる場合か！」

「一応止血したが早くその怪我なんとかしねえと！」

「大丈夫だよ。これくらい大したことないから。」

しかしそう言った途端体制を崩して倒れそうになった。

上条はつかさずインデックスを抱えた。

「お前10万3千冊の魔道書を持つてるんだろ！
だったら傷を治す術ぐらいあるはずだ。」

「あるにはあるけど君には無理。」

この言葉を言われた上条は一瞬訳がわからなかった。

「私がとうまに術式を教えてそれを完全に真似したところで
とうまの右手の力が邪魔をする。」

「何だと……。何でだよ！！またこの右手が悪いのかよ！！畜生
！！」

悔しさと自分の無力さによって今にも泣き出しそうな上条はそう呟いた。

「とうまの右手じゃなくて超能力と言うのがダメなんだと思う。」

「つまり……。どういうことだ？」

「魔術というのは才能のある人間には使えないんだよ。」

才能のない人間が才能のある人間と同じことがしたいって生み出されたのが魔術。」

「じゃあつまり、ここで超能力開発を受けた学生達全員は。」

「そう、魔術は使えない。」

この言葉を聞いた上条は絶望した。

知り合いに頼んでも能力開発を受けているからどっちにしろ無意味だからだ。

しばらくの間冷たい雰囲気を取りを包んでいたが、

「なら・・・俺が試す。」

イタチが喋り出した。

しかも魔術を再現しようと言うのだ。

「え？でもいたちに魔術は使えないんじゃない？・・・。」

心配そうにインデックスが話しかけた。

無理もないイタチは魔術なんて一度も使ったことがない人間だからだ。

「俺の眼、写輪眼は高速で動く物に対応でき、相手の忍術・幻術・体術の仕組みを見切り、また相手の術を自分の物として扱うことも出来る。そしてチャクラの流れや形として視認することができ、性質を色で見分けることも可能で、更には影分身と本体を識別することができるがそれは忍術のみだと思っていた。

だがステイルとか言う男と闘った時に気づいたのだが、どうやらチャクラと魔力は大して変わらないみたいだ。おかげで魔道書のだいたいや炎の化け物などの仕組みも解析することができた。」

「じゃあつまり・・・。」

「俺なら魔術を再現できるかもしれない。」

上条達に希望の光が見えた。

あくまで可能性だがイタチが魔術を使えるかもしれないと言う期待が上がった。

ちょうどその時インデックスの体を白い光が包んだ。

「警告第二章第六節出血による生命力の流出が一定を超えたため、強制的にヨハネのペンが目覚めます。

現状を維持すればおよそ15分後に必要な生命力を失い、私は絶命します。

これから私の指示に従って適切な処置を行なってくれば幸いです。

」

「イタチさん、俺救急車を呼んできます。

イタチさんはインデックスの言われた通りの事を行なってください。後絶対に意識が飛ばないようにお願いします。」

「言われなくても分かってる。」

「なあインデックス、俺に出来ることはないのか？」

「ありません。

この場における最良の選択肢はあなたがこの場を立ち去ることです。あなたがいるだけで回復魔術が打ち消されてしまいます。」

上条は右手を見つめながら悔しそうな表情をした。

「当麻君……。」

「イタチさん……インデックスの事お願いします。」

「……ああ任せておけ。」

上条はイタチに任せた後すぐにこの場を後にして立ち去った。
その時の上条の表情は憎しみや悔しさなどの怒りに満ち溢れていた。

第二の巻 炎の魔術師（後書き）

ヤバイ、なんかアイデアが段々浮かばなくなってきた。
他のユーザーの方々は良くもあんなにアイデアがポンポン浮かぶ
な。

しかも気がついたら上条さん今回活躍してねえやん。
なんかスマソ。

後次の話は明後日に投稿します。

第三の巻 魔術（前書き）

遅れてすみません。

後急いで書いたからグダグダかもしれません。

それと題名もあまり思いつかなかったので適当にしました。
大変申し訳ない。

第三の巻 魔術

上条が去ったあとイタチはインデックスの指示を仰ぎながらちよくちよくと魔術

の準備をしていた。

そして今ようやく準備が整ったところだ。

「それでは天使を降臨させて神殿を作ります。

イタチさんは私の後に続いて呪文を唱えてください。」

「分かった。」

インデックスは呪文を唱え始めた、イタチもそれに続いて唱え始めた。

しばらくして突然机が揺れだし、やがては部屋を揺るがすほどの揺れになった。

数十秒ぐらいに揺れはおさまり、インデックスは呪文を唱えるのを止めた。

「リンクしました。」

「・・・ようやくか。」

「今このテーブルはこの部屋とリンクしています。

この部屋で起きたことはテーブルで起き、テーブルの上で起きたことはこの部屋で起きます。

思い浮かべなさい金色の天使 二枚の羽を持つ美しい天使の姿を・・・」

（天使か・・・）

イタチは天使の姿を想像し続けた、やがて白い光のようなものが部屋の辺を

照らし始め、真ん中に天使のような女性が宙を浮いていた。

その容姿は自分が所属していた組織 ” 暁 ” の構成員の一人小楠によく似ている。

天使のようなものが微笑んだ途端上に昇華した。

それと同時にインデックスの怪我也回復した。

どうやら魔術は成功したようだ。

「生命の危機を脱出。ヨハネのペンを停止します。」

そう言ったとたん表情と雰囲気が一瞬で変わった。

それと同時にフラツと倒れそうになった。

イタチはつかさずインデックスを抱えた。

「大丈夫か？」

イタチが心配そうに呟いた。

「治すには自分の体力がいるだけ。

怪我は治っているから問題ないよ。

それに背負わせることもなかったし。」

「それは俺と当麻君にか？」

「・・・うん。」

「自分の事より俺達の心配するとはな・・・。
まあそんな事より今は早く寝たほうがいい。」

「そうだね。」

そう言ったあとにインデックスは深い眠りに入った。
彼女が寝た後にイタチも机にうつぶせになって寝た。

「イタチさーん？起きてくださいもう朝ですよ。」

んんん！？という声を出しながらイタチは目覚めた。

「もう朝か・・・。」

「そう言えばインデックスはどうしたんだ？」

「あー、アイツなら・・・ほら。」

上条が指をさした方向を見ると、そこにはまるで蟒蛇のように飯を食べているインデックスがいた。

その姿は昨日起きた事がまるで嘘のような感じだった。

「・・・元気そうだな。」

「ホントですよ、こっちはビリビリに付きまとわれるわスキルアウ
トに追いかけてクタクタだっていうのに無理矢理飯を作らされ
たんですよ・・・はあ・・・不幸だ。」

「それは災難だったな。」

「上条さんの苦勞が分かってくれんのはイタチさんだけですよ・・・」
「」

上条は少しだけ嬉しそうに呟いた。

恐らく初めて同情してもらえたからだろう。

「なあインデックス、そろそろ本当の事しゃべってくれないか？
上条さんとしては少し分らないところが多いからな。」

「・・・いいよ。なら全てを話すよ。」

ここでインデックスのかわす空気が変わった。

「まず最初になんで十字教は一つだったのにいくつも分裂したと思う?。」

「んー?。」

「宗教に聖地を混ぜたからだよ、分裂し、隊列し、バラバラの道を歩むことになったからだよ。同じ神様を信じてるのにそれぞれが独自の進化を遂げて個性を手に入れたんだよ。」

「個性ねえ……。」

「私の所属するイギリス正教は魔術の国だから魔女狩りや宗教裁判など

対魔術師用の文化が異常にに発達したの。

だからイギリス正教には特別な部署が存在するんだよ。

魔術師を倒すために魔術を調べてその対抗策をねる必要悪の教会

”ネセサリウス”。」

「ネセサリウス?。」

「だけど穢れた敵を理解すれば心は穢れ、穢れた敵に触れれば体が穢れる。」

「つまりその穢れを一手に引き受ける部署、その最たるものが君の頭に眠る魔道書図書館というわけか。

となるとお前は強引に叩き込まれたのか?。」

「その通りだよ。」

「えーとつまりはどういう事？」

「さっきの話をまとめると魔術には対抗策がある。忍術のようにな。10万3千冊に値する魔術の文献を記憶しておけば世界中の魔術師に対抗できるとみた。」

恐らく相当な記憶力を持っているこの娘だからこそ。」

「叩き込まれた……。」

「……うん。」

「ていうかそんなにやばいものなら原典を読まずに捨てればいいじゃないか。」

「大事なものは原典じゃなくて中身だから。」

原典を消してもそれを使いかけちゃったら意味がないの。それに原点の処分は人間には無理。

だから封印するとかしか意味がないの。」

「要するに連中はお前の頭の中の爆弾が欲しいと言うわけか。」

「10万3千冊の魔道書はたちの推測通り世界を例外なくねじ曲げることができる。だから。」

「てめえ！なんでそんな大事な話を今まで黙ってた！！？」

いきなり怒鳴られたインデックスは半泣きになった。

「だって、信じてくれると思わなかったし、怖がらせたくなかったし、

それに・・・その・・・嫌われなくなかったし。」

「・・・まさかこんな小娘に舐められるとはな。」

「全くだ！！ネセサリウス？10万3千冊の魔道書？

とんでもない話だったし聞いた今でも信じられねえよ！！

だがな！！俺にはこの右手がある、これがあればどんな魔術師が来ようが

屁でもねえ！！。だから少しは俺の事を信用しろ。」

さっきまで不安と言う文字が頭の中を書き回っていたインデックスだが

今で少しだけ表情が穏やかになった。

「じゃあ聞くけど私と一緒に地獄の底まで付いて来てくれる？」

「君の言う地獄がどれほどなのかは知らないが・・・付き合ってやるう。」

「ああその通りさ。地獄だろうが天国だろうとどこまでも付き合ってやるよ。」

二人の言葉を聞いたインデックスは今にも泣き出しそうな表情だった。

「・・・ごめんね、私のために。」

「気にするな、それが仲間ってもんだ。」

この世界に来て初めて満面の笑みを見せたイタチだった。

「そうそう、そんなに泣いてると赤ちゃんと思われるぞ。」

この時インデックスの中で何かが吹っ切れたような音がした。

「ん？どうしたんだインデックス？自分が赤ちゃんだって認めるのか？」

そう言った次の瞬間インデックスは上条の頭に噛み付いた。
部屋にはとてつもなく大きな断末魔が響きわたった。

一方その頃、
寮から遠く離れた場所でステイルとが上条の部屋の内部を双眼鏡で観察していた。

そしてその隣には日本人と思われる黒髪の女性が立っていた。
その様子はまるで金で雇われたスナイパーのようだ。

「インデックスは？」

黒髪の女性がステイルに尋ねた。

「生きてるよ。」

さりげなくそう答えた。

「彼女に同伴していた少年と青年の身元は分かりましたか？」

「少年の方は上条当麻と言ってたただの喧嘩っ早い学生のようなのだがもう一人の赤雲黒マントに関しては何一つ掴めなかった。」

「不明ですか……。」

もし彼がこの人間じゃないとなると非常に不味いですよ。」

「だとしてもどうする？ 僕じゃ全然歯が立たなかったしね。」

「なら今度は私が行きます。」

「大丈夫なのか？ 僕の見た感じだと短時間でイノケンティウスの弱点を見切る洞察力、聖人クラスの身体能力を持っている。

あの態度からしてまだ強力な術を持っているみたいだったしね。それに3つの黒い勾玉模様の赤い瞳には注意したほうがいい。あれには何かある。僕も手を貸すよ。」

「私を誰だと思っているのですか？ あなたの手は借りません。私一人で彼らからインデックスを奪還してみせます。」

「……それにしても僕たちはいつまであれを引き裂き続けるのかな……。」

スタイルがふてくされたように呟いた。

「複雑な気持ちですか？ かつてあの場所にいたあなたとしては？」

「……いつものことさ。」

それから数時間の時が経ち学園都市に夜が訪れた。
その頃上条達は銭湯を済まし帰宅の途中だった。

「いやー、さっぱりした。」

「銭湯にいた女の人達なんかみんないたたちの事ばっか見てたけどなんで？」

「知らん。むしろその理由を知りたい。」

それはあんたがイケメンだからだよ！！というか上条さんもあんな風にちやほや
されてえ！！と頭の中で叫ぶ上条だった。

「ちょっと用事を思い出した。すまんが二人は先に帰っていてくれ。」

「え、用事ですか？」

「ああ、すぐ戻る。」

そう言ったイタチはどこかへ向かっていった。

そして都市の中をずっと歩いていった。

数十分ぐらい歩いて人気のない廃工場に着いた。
やがて廃工場の中心部に着いた途端足を止めた。

「そろそろか・・・。」

もう出てきたらどうですか、魔術師さん。」

そう言った瞬間、物陰から黒髪の女性が出てきた。

「はじめまして、神裂火織と申します。」

第三の巻 魔術（後書き）

次回はイタチVS神裂です。
投稿は明明後日以降の予定です。

第四の巻 神裂火織

「率直に言います赤雲さん。彼女をこちらに引き渡してくれませんか？」

「その赤雲と呼ぶのはやめてくれないか？」

俺にはうちはイタチと言う名前があるのだからな。」

「申し訳ありません。ではイタチさん、彼女をこちらに引き渡してください。」

出来ればもう一つの名は名乗りたくないのですが……。」

「魔法名を名乗りたくないか……つまり無駄な争いはしたくないと？」

魔法名と言うのは魔術師達が殺し合いをする時にだけ名乗る事が許されている。

それを名乗らないということは争いをしたくないと言う意味なのかもしれない。

「まあそんなところです。」

「なら……断ると言ったらどうするつもりだ？」

そう言った瞬間神裂は刀に手を差し伸べ、居合切りのようなモーションをとった。

すると突然鎌鼬のような斬撃が発生しイタチの後ろにある機材をまっぴらに切断した。

「・・・随分荒っぽいな。」

だが、ワイヤーの斬撃ごときで俺が引くと思っているのか？」

たった一度とは言えイタチはさっきの斬撃をすでに見切っていた。

「・・・たった一度見ただけで七閃の仕組みを看破するとはやりますね。」

ですが今度はあなたに放ちます。

ズタボロになりたくなければ引き渡すと承諾してください。」

「・・・悪いが承諾することはナンセンスだ。」

「よろしいのですか？なら私はあなたを殺してでも承諾させます。」

「なら・・・」

ここでイタチの雰囲気が変わった。

「その前に俺がお前を殺す・・・。」

両者に間にはただならぬ空気が漂っていた。

それはまるで宮本武蔵と佐々木小次郎が己の命を掛けて闘うような感じた。

しばらくして機材から水滴が落ちた音がしたとき両者共動き出した。この時、闘いの火蓋が切って落とされた。

まず最初に攻撃をしたのは神裂の方だ。

七閃と呼ばれるワイヤー斬撃をイタチに放った。

イタチはそれを軽々とかわして空中から神裂の懐に入り込もうとした。

それを予測していた神裂はワイヤーを操作してイタチに向けた。

いくらイタチでも空中は身動きができないと踏んだからである。

神裂の読み通りワイヤーはイタチに直撃した。

しかしその瞬間イタチの体が丸太に変わった。

それを見た神裂は驚き、急いで辺りを見渡した。

そのスキを付いてイタチは防御が手薄の肌が露出している腹目掛けて蹴りを放った。

だが神裂は蹴りをかわしてカウンターをした。

イタチはそれかわし、顔を狙って拳を放った。

神裂はそれかわしイタチ目掛けて蹴りを放った。

こんなふうにイタチが攻撃すれば神裂はかわして反撃をし、神裂が攻撃すればイタチもかわして反撃をするという攻防がしばらく続いた。

埒があかなくなった両者は一旦距離をとり、そのまま睨み合いが続いた。

「・・・どうやらまだ俺を殺すほどの實力は出してないようだな。まずは俺の實力を確かめてからと言う事か？」

「それはあなたとて同じことでしょう？
なぜシャリンガンというのを使わないのですか？」

「・・・写輪眼の事を知っていたとはな・・・。」

「ということはあのステイルとか言う擬似神父と仲間と言うことか？」

「ステイルはれっきとした神父です。擬似なんかではありません。」

「まあ・・・そんなことはさておき・・・。」

イタチは両目を閉じ、再び両目を開いた。
その時には写輪眼を発動していた。

「……あれがシャリンガンですか……用心しなくては。」

神裂はそう頭の中で呟いた。

「少し本気を出させてもらう……。」

ここでイタチの空気がさらに変わった。

「どうぞお構いなく……。」

イタチは超スピードで印を結び始めた。
そして印を結び終わると……

「火遁・豪火球の術」

イタチの口から巨大な火球が吐き出された。

その火球は神裂目掛けて一直線に飛んでいった。

ワイヤーが使えないと判断した神裂は手持ちの大刀“七天七刀”の水の術式で対抗した。

水の術が豪火球を一掃してイタチの立っている場所に爆発が起きた。
しかしイタチはすでに神裂の背後に回り込み、後頭部を狙って回し蹴りを放とうとした。

しかし……

「何とも同じ手にかかると思いますか？」

突然イタチの動きが止まった、見てみると体中にワイヤーが巻きついていた。

「同じ手を使われてやられるほど私は甘くありません。
このまま炎の術式を使えばあなたを焼き殺すことが出来ますが、
降参するのであれば話は別ですが・・・どうしますか？」

「・・・なら一言いいか？」

「別にどうぞ。」

「自分の体を見てみたほうがいい・・・。」

「何を言っているのかさっぱりですが・・・まだ強がると言つのならあなたを
火炙りにします。」

「もう一度だけ言う・・・自分の体をよく見てみたほうがいい。」

イタチの言われるがままに自分の体を見てみると

「こ、これは・・・一体!!?」

なんとワイヤーでグルグル巻きにされていたのはイタチの方ではなく神裂だった。

目の前の出来事に神裂は戸惑いを隠せないでいた。

「・・・もう少しで自分を火炙りにする所だったな。」

「そんな!!あなたをワイヤーで縛り挙げたはず!!なのにどうして私が!!!!」

「幻術だ。」

「げ……げんじゅつ？」

「その名のとおり相手に幻覚を見せる術だ。

お前は俺の目を見た時から既に幻術に掛かっていたと言っわけだ。」

「しかし……いつ目を……!!」

思い返していたらすぐにひらめいた、目があったのはイタチが背後に回り込んだのを狙ってワイヤーを操作したときである。

「……あの時既に幻術にはまっていたと言っわけですか。」

「さてどうする？」

このまま殺されるか知ってることを全て吐き捨てるか、どちらか選ぶ方がいい。」

「この程度のワイヤーで私を捕まえたつもりですか？
こんなワイヤーなどすぐに……え!？」

普段なら神裂はこんなワイヤー程度簡単に引きちぎれるがなぜか思うように

力が入らず、ワイヤーはちぎれなかった。

「俺が何の対策をしていないとでも？」

ついでに金縛りの幻術も掛けておいた、何か見えるはずだが？」

言われたとおりに見てみると神裂の体にはたくさんの杭が突き刺さっていた。

神裂には敗北フラグがつきまっていた。

「さて・・・質問の答えはなんですか？」

「・・・これが私の全力だとしても？甘く見られては困ります。」

たったさっきまで身動き一つ出来ないでいたが、急にワイヤーのちぎれる音がした。

「救われぬ者に救いの手を”Salvere 000”!!!」

金縛りの幻術”魔幻・枷杭の術”を力で強引に破ってみせた。
近くにおいては危険だと判断したイタチは空中でバク転しながら後ろに下がった。

「さっきから普通の人間とは思っていたが、まさか俺の幻術を力で破るとは・・・化け物だな。」

「それは褒め言葉として受け取っておきましょう。
ですが私に魔法名を名乗らせるとは大したものです。
なのでここからは本気で行かせてもらいます。」

神裂は目を閉じ刀に触れると急に静かになった。

イタチは何かが来ると警戒をしながら写輪眼で目視し続けていたが・
・

バシユ！！

気がついたら神裂は刀を振り抜いていた。
イタチの身体から大量の血が噴水のように噴き出した。
それと同時にドサツ！と言う音をたてながら俯せに倒れ込んだ。

「・・・これが七閃より上位に達する、真説の唯閃。
ですが急所ははずしてあります、すぐに回復させますのでご安心を。」

そう言つて神裂が後ろを振り向くと、いきなり胴蹴りを喰らつた。
蹴りを喰らつた彼女は壁に押し付けられたが、すぐに体制を立て直
そうとした。

しかし足を強く踏まれ、腹に強烈な拳を打ち込まれ、両手を強く押
さえつけられるなどスキを与えない速やかな攻撃で完全に動きを封
じられた。

「唯閃を喰らつて・・・大怪我をしたのではないの・・・ですか？」

「喰らつたのは俺の分身だ。」

とはいえ少しでも遅れていたらやられていたがな・・・。」

そう言つた後に少し離れたところで倒れているイタチがたくさん
の鳥となつてどこかへ飛んでいった。

このまま暴れられるのはまずいと悟つたイタチは催眠眼で眠らせた。
神裂はそのまま眠ってしまった。

「・・・何とかなつたか・・・このまま暴れられたら万華鏡、い
やアレを使わざるを得なかつたかもしれないな。」

「・・・ここは？」

「気がつきましたか？」

辺りを見てみるとそこは工場の外で自分は木に巻き付けられていた。彼女は力を込めてワイヤーを引きちぎろうとした。

「無駄だ・・・武器はすでにこちらの手にある。それにワイヤーにチャクラを流してお前の魔力を乱している。力を出すことや解放することなどできないぞ。」

この時点で彼女は手も足も出ない状態だった。

「質問だが、なぜあの娘を付回す？」

事情によつてはインデックスを引き渡し、あの娘の事は忘れよう。」

「・・・本当に彼女から手を引いてくれるのですか？」

「全てを話すと言うのならな。」

「・・・分かりました。それでは全てお話ししましょう。」

神裂の表情が少しだけ変わった、どこことなく悲しそうな表情だ。

イタチはワイヤーを切断し、回収していた七天七刀を神裂に返した。

「私はイギリス正教、必要悪の教会所属の魔術師です。」

「必要悪の教会だと？それじゃあ貴方は……。」

「そうです。私は彼女の同僚にして、大切な親友なのですよ。」

イタチは少しだけ驚いた、まさか親友が親友を痛めつけているとは思わなかったからである。

「……インデックスを追い回しているのは、そうでもしないと死んでしまう、

または上から命令されて仕方なくやっているのか？」

「前者です……。」

「死ぬだとか？どういう意味だ？」

「完全記憶能力……。」

彼女は膨大な量の魔道書をその完全記憶能力で記憶しています。

ですが、結果として彼女の脳の容量の85%が、魔道書の記録で埋め尽くされてしまったんですよ。

だから彼女は残りの15%しか脳を使えない。

しかし完全記憶能力を持つ彼女は、その15%さえも、木の葉の形や色など、如何でもいい記憶で埋め尽くしてしまう……。

だから彼女は1年ごとに記憶を消さなければ、脳がパンクして死んでしまう。

彼女が私を親友と気づかないのは当然です。

彼女には1年前からの記憶が消されているのですから。私たちの手

で……。」

神裂の表情には、悔しさ、悲しさなどが感じ取れた。

しかしそういう感情を殺してインデックスの記憶を消さなければならぬ辛さ。

イタチはなぜか昔の自分を見ているような気分だった。

里の平和を維持するために自分の一族を全員抹殺しなければならぬと言う、

残酷な任務。

だがイタチは己の感情を殺してその任務をやり遂げた。

だが平和のために任務をやり遂げたとはいえその時の悲しみや辛さは計り知れなかった。

イタチは神裂に同情出来るような気がした。

しかしイタチは自分の心の内を伝えるため無理矢理口を開いた。

「神裂さん……あなたの気持ちは痛いほど分かりますよ。

……仲間や親友を手にかける感覚はとも口で言い表せるようなものではないですからね。

だが少し見当違いをしているようだ。」

第四の巻 神裂火織（後書き）

今回の話でイタチの過去を書いていたらなんか涙が出てしまった。
後神裂のやられ方なんです、本気で暴れる前に行動を停止させられたと言う事です。

なので決して神裂は弱くありません。

それと明日から塾が始まるので次はいつになるかわかりません。
暇があれば投稿します。

第五の巻 真実

闘いが終了してから数十分後、イタチと神裂の二人は上条宅目指してビル群を飛び回っていた。

「本当にこの方向で大丈夫なのですか？」

と言うより・・・なぜ私たちが鳥の後をつけなければ・・・」

「帰り道に迷わないようにこいつに当麻君の後をつけさせておいた。ただそれだけだ。」

「しかし鳥の後をつけるなんて変な気分なのですが・・・」

イタチは神裂の愚痴を無視しながらただひたすら家を目指して飛んだ。

なにげない会話をしながらも二人の表情は少し焦っているようだった。

その理由は数十分前にさかのぼる。

「見当違い・・・？それはどういう意味なのか・・・？」

半泣き顔の神裂は尋ねた。

「記憶にも色々あつてな。

言葉や意味を司る意味記憶、運動の慣れを司る手続き記憶
そして想い出を司るエピソード記憶など色々あるわけだ。」

「何が言いたいのですか？」

「要するにいくら知識を積み込んでもそれで脳がパンクして死ぬなんてのは

絶対有り得ない。

元々人間は140年分の記憶が可能だ。」

「じゃあつまり私達は上層部の嘘をまに受けて、馬鹿正直に彼女の記憶を奪ってきたと言つのですか・・・。

まさか科学と魔術に無縁な貴方が説明するとは・・・皮肉ですね。」

神裂は泣いているが顔からは悔しさと怒りが感じ取れた。

インデックスの記憶を一年周期で消さなければいけないのは10万3千冊の魔道書により脳が圧迫されているからではない。

その事実を知ることが出来れば彼女を救う事が出来たかもしれないからだ。

「・・・話を戻すが。」

ここで場の雰囲気が変わった。

「インデックスの記憶を消さないと死ぬ。
これは事実ですか？」

「・・・あの子の記憶を消す直前、突然発作が襲ったのです。
しかし記憶を消したら発作がおさまりました。」

「つまり脳は暴発しない、だが発作がインデックスを襲う。
さつきまでは物に飛びついて噛み付く事が出来る程の元気。
となると思いつく原因はただ一つ・・・」

「10万3千冊もの魔道書は上層部にとって恐れの種類。
それをコントロールする彼女は強大な存在。

彼女の裏切りを恐れたイギリス清教が彼女に魔術的な首輪を用意して
魔力を生成できない状態にし、更に一年ごとの記憶を消すことで
彼女を管理しようとした

「・・・何とも許し難い話です。

しかしあの子の体を調べるより他はありません。
ですが”歩く教会”がそれを邪魔します。」

「その心配はない。

なぜなら昨日当麻君が”歩く教会”を右手の力で破壊してくれた。
おかげで手間が省けたと思うが？」

「ちょっと待ってください、破壊したとはどういう意味です？」

「彼には”幻想殺し”と言う異能の力なら何でも無効化するといっ
た奇妙な力を右手に宿している。

その力で”歩く教会”を破壊したと言うわけだ。」

「・・・あの”歩く教会”が、どうりで私の攻撃通るわけですね。」
二人が会話をしている時、どこからか一羽の烏がイタチの肩に降り立った。

しばらく烏と会話をしていたイタチだが突然険しい表情になった。

「神裂さん、大変な事になった。」

「一体どうしましたか？」

「インデックスが倒れたらしい・・・それも貴方がさっき言ったとおり発作で。」

「なんですって!？」

神裂の顔が蒼白になった。

「急いで当麻君の家に向かうのですぐ準備をしてください。」

「分かりました、スタイルにも連絡します。」

「その必要はない、彼も一緒にいるようだ。」

「そうですか。」

「あまり時間がない、少し飛ばしますが大丈夫ですか？」

「フッ、聖人の身体能力を舐めてもらっては困ります。
私なら建物の上を飛ぶことぐらいたやすいですよ。」

「それもそうだな。」

ここで二人はイタチの鳥をつけながら超スピードでこの場を後にした。

そして現在に至るわけである。

途中「じゃん」と叫ぶアンチスキルや「ですよ」と叫ぶ風紀委員に追いかけられたが烏分身や幻術とかで何とかやり過ごした。しばらく飛び回った所で上条が暮らしている寮に着いた。

エレベーターや階段を使ったら時間がもったいないと思ったイタチと神裂は一気に数階までジャンプした。

そして上条宅の扉を蹴飛ばして入ってきた。

「イタチさん！」

「神裂！」

部屋のベッドに発作で苦しむインデックス、部屋の隅っこで固まっている上条、

インデックスの記憶を消そうと準備しているステイルがいた。

「神裂！！なんでこの男と一緒にいるんだ！！？まあいい早く記憶を消すぞ。」

「待つてください、あなたがたに話があります。」

「話だと？」

神裂はステイルと上条にイタチが話した事を全て打ち明けた。それを聞いたステイルと上条は驚愕した。

「それじゃあ教会は僕達に嘘を？クソッ、なんてことだ！」

「ああ、ひでえ話だぜまったく！インデックスを何だと思ってやる！！」

二人を怒りをあらわにしていた。

特にステイルの方が悔しさや怒りが強く出ていた。

「それで、この子を縛っている首輪はどこにあるんだい？」

「それは俺に任せてもらおう・・・。」

そう言うといタチは写輪眼でインデックスを観察した、すると・・・

「・・・当麻君、この娘の口の中に右手を突っ込んでくれ。」

「ええっ！？」

「おいおいまさか殺すきか！？手が付けられないから殺すと言っのか！！？この悪魔ry」

ステイルは最後まで言うこともなくイタチに殴られて吹っ飛んだ。

「少し静かにしてくれないか？正直耳障りだ・・・。」

睨まれたステイルは舌打ちしながら黙り込んだ。

「イタチさん、この少年の右手をインデックスの口の中に入れる言
うのなら

何か見つかったのですか？」

「ああ、喉元に奇妙な刻印が見つかった。そういう訳だから当麻君。」

「ああ分かったぜ。」

上条はインデックスの口の中に手をつ込み、刻印に触れた。この時だれもが一件落着くと思いきんでいた。

しかし上条が喉元に触れた瞬間謎の力で吹っ飛ばされた。それと同時にインデックスは黒いオーラを纏い立ち上がった。

「警告、第三章第二節。Index-Librorumu-prohibitorium。」

第1から第3までの全結界の貫通を確認。

再生準備・・・失敗。自己再生・・・不可能。

現状、十万三千冊の書庫の保護のため、侵入者の迎撃を実行します。書庫内の10万3千冊により、結界を貫通した魔術の術式を逆算・

・失敗。

該当できる魔術の詳細は不明。

術式の構成をあばきます。

・・・侵入者に対して最も有効な魔術の組み合わせに成功。」

するとインデックスの目から結界が発生した。

「これより特定魔術”セントジョージの聖域”を発動。

侵入者を撃退します。」

気が付けば黒い稲妻のようなものが結界に張り巡らされていた。

「・・・どうやら魔術が使えないと言うのも嘘だったようだな。

冷静に考えてみればそんな重要な事を上層部が貴方達にそう易々と

教える訳もない・・・か。

そうなればインデックスを縛っている魔術を破壊するより手はない。

「

「言われなくても」

「心得ているつもりです!!」

「インデックス、必ずお前を救ってやる。」

イタチ 上条 ステイル 神裂の4人は戦闘態勢に入った。

第五の巻 真実（後書き）

次回も時間があれば投稿します。

第六の巻 万華鏡写輪眼（前書き）

今回は戦闘シーンのみです。
それではお楽しみください。

第六の巻 万華鏡写輪眼

インデックスの身体が青白く光り出した、それと同時に蒼白い閃光が4人に、轟音を立てながら向かった。

上条は右手を突き出して無効化をはかろうとした。

しかし普段ならとくに打ち消されてるはずなのだがなぜか打ち消せないでいた。

それ処か次第に押され始めていた。

そこへ、

「曖昧な可能性などどうでもいい。

あの子の記憶を消せば取り敢えずはそれで命が助かる、僕はそのためなら誰でも殺すいくらでも壊す。

そう決めたんだ・・・ずっと、前に・・・。」

「取り敢えずだなふざけやがって。

そんなつまんねえ事はどうでもいい一つだけ答える魔術師。

お前らはいいつを助けたくないのか！！？」

この言葉にスタイルは度肝を抜かれたような感覚になった。

「お前達はずっと待ち続けていたんだろ！？」

インデックスの記憶を消さなくても済む、インデックスの敵に回らなくても済む。

そんな誰もが笑って誰もが望む最高のハッピーエンドって奴を！！今まで待ち焦がれていたんだろ！？

こんな展開になるのを、何のために痛みを背負って来んだ！！

お前達は命を掛けてインデックスを守りたいとは思わないのかよ！！」

戦闘態勢に入っただけとはいえまだ決心がついてなかった神裂とステイルは上条の言葉で目が覚めたように決心が着いた。

もう迷いはしない・・・命に換えてももあの子を守ってみせる！！といった意志が神裂とステイルの二人の顔からそれが感じ取れた。一方さつきから押され気味の上条はそろそろ限界に達していた。彼の右手からは少しずつ血が流れていった。

「salvere・・・000!!!」

このままでは上条が危ないと悟った神裂はワイヤーで畳をひっぺ返した。

それによりインデックスはのけぞり、白い閃光の軌道がずれた。

閃光は上条の部屋の天井を貫通して遙か上空に進んでいった。

天井が壊れたと同時に白い羽があちこちに宙を舞っていた。

「こ・・・これは一体？」

羽に触ろうと上条は手を差し伸べようとしたが、

「うかつに触るな・・・。それに一枚でも触れたらただでは済まない。」

イタチが引き止めた。

「これは・・・ドラゴンプレス!？」

伝説にあるセントジョージのドラゴンの一撃と同義です。

イタチさんの言うとおりたった一枚でも触れたら大変です!!」

さつきまでのけぞっていたインデックスだが体制を立て直して再び

ドラゴンブレスを発射した。

それに光線の範囲がさっきと比べたら数倍以上もあった。

上条はさっきのダメージで右手に大怪我を追ってしまったので対応が遅れていた。

巨大な光線によって上条達は一掃されそうになった。

この時イタチはある考え事をしていた。

上層部に振り回された挙句、インデックスを救えずに死ぬなんてのは間違っている。

なんとしてでもこの人たちの願いを叶えさせてあげたい……。それを分かった上で、

「万華鏡写輪眼」

イタチは万華鏡写輪眼を発動した。

だがこの時違和感を感じた、普通の万華鏡と違う……そんな感じだ。

しかし今は考えている暇はないので自身の持つ絶対防御である”須佐能乎”を発動。

赤い炎の様なオーラをまとい天井を破壊して巨大な骸骨が浮かび上がった。

そして筋肉の組織のようなものが骸骨を覆い尽くし、最終的には鬼のような顔をした巨人になった。

イタチは巨人の左手に持つてる八咫鏡で上条達を守った。

その衝撃の余波が部屋を次々と破壊していった。

「今だ！！走れ当麻君！！」

なんとか突破口を作ったイタチは叫んだ。

そして頷いた上条は猛獣のような雄叫びを上げながらインデックスの方へ走っていった。

「警告第6章13節、新たな敵兵を確認。
戦闘思考を変更、術式の逆算・・・失敗。
現状最も危険な敵兵上条当麻の破壊を最優先します。」

インデックスは無数のドラゴンブレスを上条に放った。
邪魔はさせんとイタチは右目を一旦閉じた。
しばらくして右目から血が湧き出し、

「天照！！」

右目を開いた瞬間黒炎が発生し、ドラゴンブレスを受け止めた。
しかしまだ光線はまだ大量にあった。

元々イタチは目をつぶれば黒炎を鎮火できるがコントロールは出来ない。

だが今なら黒炎をコントロール出来る気がしていた彼は、

「炎遁・・・加具土命」

イタチはうちは一族ですら制御不可の天照のコントロールに成功した。

内心はかなり驚いているようだったが。

そして黒炎を操作して巨大な盾を作り、ドラゴンブレスを一気に受け止めた。

黒炎と閃光の激しい衝突が長時間続いた。

天照は対象が燃え尽きるまで消えないが伝説の魔術と言うこともあって中々

燃やし尽くせないからである。

上条はそのスキを狙ってなんとかインデックスに近づく事に成功した。

そして痛みに堪えながらも右手を強く握り締めて突っ込んだ。

「神様・・・この世界があんたの作ったシステムだって言うなら。まずは、その幻想をぶち殺す!!」

上条はインデックスの頭に触れた。

するとさっきまでの禍々しいオーラなどが消え倒れそうになった。

「警・・・告最終・・・章第0・・・首輪・・・致命的・・・破壊。再生・・・不可。」

インデックスはその場に倒れ込んだ。

それと同時にイタチは万華鏡から通常の写輪眼に戻した。

須佐能乎の巨人は消え去り黒炎も徐々に鎮火していった。

しかしそれと同時に膝を勢いよくついてしまった。

恐らく須佐能乎と天照を長時間使用した事による極度疲労が原因だろう。

「大丈夫ですか？」

心配した神裂がイタチに声をかけた。

「大丈夫だ・・・、それより・・・あの娘は・・・？」

自分の事よりインデックスが気になった彼は尋ねた。

「大丈夫だ、もうこの通り気持ちよさそうに眠っている。」

上条は心配すんなと言う感じで言った。

「そ・・・そうか・・・よくやつ・・・た・・・な。」

力尽きたイタチはとうとうその場に倒れ込んでしまった。

第六の巻 万華鏡写輪眼（後書き）

なんとか時間が取れたので更新します。

しかしこれからもこのようなことが続くかもしれないのですね。

それと炎遁・加具土命を使ったということはもう誰の万華鏡とすり替わったか分かった方が大勢いると思う。

第七の巻 冥土帰し

あれから2日後、イタチは冥土返しの病院で目が覚めた。

「とうま。いたちが起きたんだよ！」

インデックスに呼ばれた上条は何？と言いながら急いで振り向いた。

「ここは・・・どこだ？」

「病院だぜ。あんた2日間も寝ていたんだ。

しかしあの時は俺も驚いたぜ、いきなり倒れたんだからな。」

「・・・万華鏡の瞳術は強力だがその分チャクラを大量に使う上に視力が低下するリスクがある。

須佐能乎の場合更に全身の細胞に痛みを与えるがな。」

「まるで諸刃の剣だな。

じゃあ今はあまり物が見えないのか？」

「・・・いやそうでもない」

「へ？何でだよ。」

「さあな、俺が知りたいぐらいだ。」

この時はこう返したが、イタチ自身実はその理由がほとんど理解していた。

だがあえて知らない素振りをした。

ちょうどその時ドアを叩く音がし、失礼するよと言いながらカエルみたいな顔をした老人が入ってきた。

彼は冥土帰しと言ってこ病院にいる凄腕の医者。

あまりに凄腕なので”冥土帰し”という異名を持つ。

どんな病気・負傷であっても最後まで患者を見捨てず、あらゆる手段を用いて治療してしまうという。

「思ったより早く回復したね。体の具合はどうか？」

「おかげさまでな。だいぶ良くなった。」

「そうかね。後それから赤い髪をした青年から君宛の手紙を預かっているのだが。」

そう言うとき冥土帰しはイタチにステイルの書いた手紙を渡した。封を開けてみると、

挨拶は無駄なので省かせてもらうよ。

全くよくもやってくれたなこの野郎！と言いたいところだけどその個人的な思いのたけをぶつけてしまうと世界中の木々を燃やし尽くしても紙が足りないのではやめておくよ。

必要最低限の礼儀として、手伝って貰った君にはあの子とそれを取り巻く環境について説明しておく。

イギリス正教は大至急彼女を連れ戻したがっていたけど、僕達を騙したことに付いて問い出したらあっさり現状維持と来やがった。

実際には様子見ということでもいいのかな。

僕個人の意見としては一瞬一秒でも君がインデックスのそばにいる

のが許せないわけだけど。

ちなみにこれは僕達が諦めてあの子を譲るという意味ではないよ。

僕達は然るべき情報を集めてきちんとした装備をし次第あの子の回収に向かう。

寝首をかくというのは趣味ではないが、首を洗ってまっているがいい。

最後に、これは上条当麻にも伝えてもらいたい。

グヌス

ステイル・マ

読み終えた瞬間、ボン！と言う音をたてながら手紙が破裂した。

イタチ以外の3人はうわっ！と言いながら驚いた。

「・・・な・・・中々過激なお友達だね・・・。

手紙に液化爆薬でも仕込んであったのかな・・・？

まあ何にしろ君はもうほとんど回復してるからいつでも退院出来るわけだが。」

「そうか。」

「本当に大丈夫なのか？」

「なあに心配するな。」

そう言うとイタチはそばに置いてあったマントと衣装を持って更衣室に向かった。

1・2分くらいした後に戻ってきた。

「それから君に渡す物がもう一つあるのだが。」

そう言うと冥土帰しは懷から小さな紙をイタチに渡した。

「これはこのIDだ。持っていくといい。」

「すみませんね。わざわざ俺のために。」

「礼などいらんよ。」

冥土帰しはそう言うと部屋から出ていった。

「さて・・・俺達もそろそろ行くか。」

「だな。」

「ねえねえとうま。」

「なんだインデックス？」

「私たちの退院祝いと言うことでどこかでご飯を食べに行くんだよ
!。」

「退院祝いねえ・・・。」

「つべこべ言わずに行くの!-!」

「俺は別にどうでもいいのだが・・・。」

「ほら、イタチさんもこう言ってる訳だし。」

「だがたまにはそういうのもいいかもしれない。」

「丁度甘味処に行きたかったところだしな。」

「・・・え・・・」

「じゃあそういうわけで出発なんだよ!!」

インデックスはステップしながら、イタチは静かに上条から少しずつ離れていった。

「ふ・・・不幸だ。」

上条はどんよりとした空気を放ちながらトボトボ歩いていった。

なぜならインデックスを店に連れていくと物凄い料金になるからだ。

それに今上条の財布の残高は532円しか残っていない。

もちろんイタチとインデックスはその事を知らない。

インデックスはそんな事気にしそっていないだろうが・・・

一方、上条達が病院を出た頃ステイルは窓のないビルの最上階にいた。

そこには大きなビーカーのような物の中に男にも女にも、子供にも老人にも見える白髪の間がいた。

この人物こそ伝説の魔術師、世界最高の科学者、学園都市の最大権力者、学園都市統括理事長のアレイスター・クロウリーである。

「ステイル・マグヌスここに来た人間は皆私の在りかたを観測して同じ反応をするのだが、機械がすることをわざわざ人間がする必要はないだろう？」

「はい・・・アレイスター統括理事長。」

「君を英国から呼び戻した理由は既に分かっているだろうが・・・、まずい事になった。」

「吸血殺し・・・ですね？」

「いるかどうか分からない・・・、とある生き物を殺す能力を有する少女が監禁されている。」

問題なのは、本来この都市に立ち入ってはならない魔術師が関わっ

ている事だ。」

「魔術・・・師ですか？」

「魔術師の一人や二人抹消する事は容易い。

問題は我々科学サイドの人間が魔術師を倒すと言う一点につきる。科学サイドと魔術サイド、お互いそれぞれの技術を独占し合ってるからこそ今の世界のバランスがある。

仮に超能力者を統べる学園都市が魔術師を倒すと言い張ればどうなるかは想像がつくだろう？」

「なるほど・・・魔術側の僕が魔術師を潰す分にはなんの問題もないと言うことですか？」

「だが私は・・・魔術師の天敵となる物を所有している。」

「幻想殺し・・・ですか？しかし超能力者を使うのはマズイのでは？」

「問題ない、あれはただのレベル0。

言わば無能力者だ、価値ある情報は何ひとつもない。

君と行動したところでこちらの情報が漏れる事はない。」

「それは・・・あの少年と行動を共にしろと言うわけですか？」

「あれにはそちらの技術を再現するほどの才能はない。故に君たちの情報が漏れることもない。」

「・・・分かりました、しかし吸血殺しなんて本当に存在するのですか？」

「存在するのであれば、ある生き物の存在も証明してしまう。」

「吸血鬼……」

「オカルトは科学サイドではなく君達の領分だと思うのだね？」

ステイルはそう言われるとここから立ち去っていった。

「うちはイタチ……君は私に面白い物を見せてくれた。
特に写輪眼と言うものは非常に興味深い。」

くれぐれも私を失望させないでくれたまえ。」

アレイスターは口元を歪ませながら呟いた。

第七の巻 冥土歸し（後書き）

遅くなって申し訳ない。

今度はもっと早くなるようにします。

余段

最近知ったのですがこの小説を何と友人達が読んでいたんですよ
w。

知ったときには皆で大笑いてしましたwww。

第八の巻 三沢塾（前書き）

全然アイディアが浮かばなかったのでまた遅くなってしまいました・
・すいません。

それと結構長くなってしまったので、最後の方は結構省略してます
自分は文章力が下手だと感じているので、もしかしたら今回の話は
面白くないかもしれません。

なにせ他のキャラが難しいので・・

第八の巻 三沢塾

「まさか甘味処に行っただけでも¥あんなにかかるとは・・・
はあ・・・不幸だ。」

上条は飢饉に苦しむ農夫のような顔＋どんよりとした雰囲気を出しながらそう呟いた。

上条より前に歩いていたインデックスは突然看板の前で立ち止まった。

「どうしたインデックス？何突っ立ってんだ？」

上条が看板を見上げてみると、そこにはアイスの絵が描かれていた。

「おい・・・まさかお前。」

上条が話しかけた瞬間インデックスはものすごい勢いで振り向き、

「とうま！！私は一言も暑い だるい 疲れたとは言っていないかも
！！」

まして他人のお金を使いたいと考えた事もないし結論としてアイスを食べたいなんてこれっポツチも思っていないもん！！」

「分かったよ。」

そんなにアイスが食べたくばエアコンのきいた部屋で食べたいと言えよかろう。」

「とうま！！この服は主の教えを主格化したものであって、
私は一度たりとも暑苦しいだとか 辛いだとか 面倒くさいとか考

えたことはないんだからね!!」

このように上条とインデックスはゴチャ言い争っていた。
上条があゝだこゝだと言えはインデックスはそれに反論し、インデックスがあゝだこゝだと言えは上条も反論する、そんなやりとりが続いた。

――元気がいいな・・・

そう思いながらイタチは2人の事を眺めていた。
口喧嘩とはいえなぜかとてもいい雰囲気だに思っていた。

「ちなみに私は修業中の身だから一切の嗜好品の摂取は禁じられているんだよ。」

「そうかそうか、じゃあ無理にアイスを食べる必要もないな。
イタチさん行こうぜ。」

上条はそう言っでインデックスから離れようとしたが、インデックスがいきなりつかんできた。
しかも物凄い鼻息を吹き出しながら。

「確かに禁じられているけどあくまで修業中だから完全なる振る舞いが出来ていたり出来ていなかったり。

従ってこの場合誰かがアイスを私の口の中に放り込んでいく可能性があるとも言えるんだよとうま!」

――こいつって・・・本当にシスター?

「うつひょー、また旗を立てようとしとるんかいなーカミヤン。」

「ホント相変わらず恨めしい奴だにゃー。」

そう言いながら現れたのは青髪の少年と金髪でいかにも不良と云う感じの少年だった。

一人は青髪ピアスといって上条の悪友で学級委員を勤めている。もう一人は土御門元春と言って彼も上条の悪友である。

クラスではこの3人組みの事をデルタフォースと呼んでいるらしい。

「それで、そのちつこいの誰ぜよ？」

「もしかして女装少年？女の子にしてはペッタンコ過ぎるし」

この時インデックスは若干頭に血が上った。

「お、お前ら言って良いことと悪いことがあるだろ・・・
いくら幼児体型だからって・・・」

そしてインデックスはこの言葉で更にイライラが増した。

「とうま・・・私は敬愛すべき謙虚なシスターです。
悔いがあるなら今のうちに聞いてあげてもいいんだよ・・・」

微笑みながら言っているが周りには黒いオーラが強く出ていた。
このままではヤバイと悟った上条は渋々アイスに向かった。
ところが向かったアイス屋は何と休業中だった。

我慢できなくなったインデックスは上条の頭に噛み付いた。
彼のギャー！！！！と言う断末魔が周りに響きわたった。

「アイス アイス アイス」

「それじゃ〜ゴチになるぜよ」

「まあ悪く思うなよカミヤン」

「また奢るはめになるとは・・・不幸だ」

うなだれきって暗い表情のまま思わずそう呟いた。

「・・・君も大変だな」

「それを分かってくれるのはイタチさんだけですよ・・・」

アイス屋が休業中だったので仕方なく近くにあったファミレスに行くことにした。

とはいえ全部上条の奢りだが。

「そう言えばまだこの人の事まだ何も聞いてへんけど。
お兄さん一体誰や？」

「うちはイタチだ。」

「赤い瞳に黒い勾玉模様が3つとは、かわったアイメイクをしてるんやな」

「ねえ皆来て来て。」

インデックスが呼んでいたのでもそこへ行ってみると、

「う……」

「……何こいつ……怪しすぎるだろ……」

黒髪ロングで巫女服を着た少女が苦しそうに這いつくばっていた。

「あの……どうかしましたか？」

怪しいとはいえこのまま放っておくのは変と感じた上条は話かけてみた。

「く……食いだおれた……」

この時5人の間に沈黙が走った。

すかさずデルタフォースの3人はじゃんけんを始めた。

負けた奴がこの人の介護をするというルールで。

3人のあいこはしばらく続いたが上条が負けたので、上条がこの人の介護をする羽目になった。

「あの……食いだおれたって何？」

そう言われた少女はゴソゴソと音をたてながら割引券のような物を取り出して、それを上条に見せた。

「一個１００円のフライドチキン・・・おトク用のクーポンが沢山あったから。」

とりあえず３５ピースほど頼んでみた・・・。」

「おトクすぎだ・・・馬鹿・・・」

「・・・。」

やけ食い・・・帰りの電車賃６００円。」

「それで？」

「全財産・・・５００円。」

「その心は？」

「買いすぎ・・・無計画。だからやけ食い」

「つかさ、それ以前に誰かから電車賃借りればいいだろ。」

これを聞いた少女は何かをひらめいたように起き上がった。

「あーなるほど。その手があったか」

「おー！！こいつは中々の美形ぜよー！！」

土御門は美人に会えた事に大喜びし、

青髪ピアスはニヤニヤしながら携帯で彼女の写真を撮った。

「１００円・・・貸して」

「あー無理無理、貸せないものは貸せない。」

「チツ・・・たかが100円ぐらい貸せないなんて」

少女は舌打ちしながら呟いた。

「たかが100円持っていないのはどこの馬鹿だよ!!!?」

「カミヤン・・・こんな美形な巫女さん相手にストレートに言うなんて、

成長したにゃー。」

「美人・・・美人に免じて後100円」

「あのな・・・俺は甘味処+この3人に奢ったから貸す余裕はないの!!!
分かる?」

「100円」

「うわー!!!こっち来たー!!!」

「1・0・0・円」

「うわー、なんでこっちにもー」

「写真撮られた」

「えっ!!!?有料?お金取るんかいなー」

「へえーこの巫女さんは顔も売るんだ」

インデックスがイライラしながら呟いた。

「私。巫女さんではない」

「いや・・・どっからどう見ても巫女さんだろ!!」

上条が大声でツツコミをいれた。

「私。魔法使い」

「ま・・・魔法使い？」

上条達（イタチ除く）はキョトンとしたが、インデックスは机をガタン!!と叩きながら立ち上がり、

「魔法使い!!? 曖昧なこと言っていないで、専門と学派と魔法名などを名乗るんだよお馬鹿!!」

大体その格好は何? 巫女さんならせめて東洋風の占星術師や祈祷師のホラを吹かなきゃダメなんだよ!!」

「ふーん・・・じゃあそれで」

インデックスはムッキー!!!と言いなが裾を噛んだ。

「なあインデックス、こいつが巫女さん改魔法使いだったのは分かったのからさー、少し黙ってて。」

「とうまー！私の時とは態度が違つかもー！私の時なんか・・・服まで脱がしたクセに・・・」

「えっ！？それってどう言う事やカミヤ・・・ん？」

6人が振り向いてみると、いつの間にかガラの悪そうな男達が集まっていた。

「誰ぜよ？このおっちゃん達」

「さあ」

5人が怪しんでいるさなか突然少女が立ち上がり、そして先頭にいた男に近づき、

「後100円」

そう言われると男は黙々とポケットの中から100円玉を取り出し、それを彼女に渡した。

「知り合い・・・なのか？」

「塾の先生」

「塾の・・・先生」

100円を受け取った少女はこの場を去っていった。
それと同時に男達も・・・

「けど、なんで塾の先生が生徒の面倒を見んねん？」

4人はただ静かにそれを見ていた。

「はぁー・・・」

土御門達と別れた後、上条 イタチ インデックスの3人は寮に帰るために歩いていた。

「どうしたのとうま？」

「お前が服を脱がされたなんて言うから・・・一緒に住んでいるっ

てもしバレたら・・・」

「う・・・だって。あー!!」

何かを見つけたインデックスは急に走って行った。

「とうまとイタチ!! ねえ見て!!」

言われるがままに見てみると、どなたかもらってくださいと言った札が書かれたダンボールの中に猫が入っていた。
恐らく捨て猫だろう。

「ねえとうま・・・お願いがあるんだけど」

「ダメ」

上条は何も聞かずにそう答えた。

「私はまだ何も言っていないんだよ!!」

「言わなくても分かるっつーの。」

どうせこの猫を飼ってもいい?・・・とか言うつもりだったんだろ?
あいにくだが学生寮はペット禁止だ。

それに俺が猫を養うほどの余裕があると思っっているのか?」

「う、でもスフィンクス飼いたーい!!」

「スフィンクスって・・・早くも名前つけてんじゃねえ!!
とにかくダメなもんはダメ!!」

「ヤーダー！！飼う飼う！！！！」

インデックスはまるでおもちゃを買ってくれと駄々をこねる幼稚園児みたいに上条に頼み込んだ。

そして上条はダメの一点張り。

二人が言い争っている間に猫は逃げてしまった。

「あーあー、ビビって逃げちまったじゃないか」

「とうまの所為！！」

そう言いながらインデックスは猫が逃げていった方向へ走っていった。

「おい、どこ行くんだよ」

上条はインデックスの後を追うとしたが、イタチに肩をつかまれた。

「ちょ、何すんだよ！！」

「まだ気づかないのか？周りをよく見てみる」

「周りって・・・はっ」

辺りを見渡してみるとさっきまで大勢いたはずの学生とかがいつの間にかいなくなっていた。

「こ・・・これって」

「確か・・・ルーンとか言う奴だったか？」

あの子が離れたと同時に結界を張ったみたいだな・・・
人が一瞬で消えたと言うことは人払いの術か？」

イタチは冷静に周りを写輪眼で見渡した。

その結果ルーンと言う術式である事が判明したようだ。

「だ・・・誰がそんな事を・・・」

「恐らくステイルとか言った男だろう」

「ステイル・・・あの時のあいつか！」

「その通りだよ」

そう言いながら物陰からステイルが出てきた。

「シャリンガンだっけ・・・本当に便利な目だね。それは」

ステイルは若干褒める様な感じで言った。

「2日ぶりだね・・・うちはイタチ、上条当麻」

「一体・・・何の様だ」

上条は睨みながら言った。

「そんな怖い顔されても困るね。まあ、本来僕たちの関係はそう言う風にいがみ合うものだろうけどね。

たった一度だけの共闘でひおってもらうのはごめんだからさ。」

ステイルは懷に手を忍び込ませ何かを引っ張り出そうとしているようだ。

それを見たイタチはいつでも幻術をかけられるようステイルの目にピントを合せ、上条は拳を強く握り締めて突撃の体制に入った。

「君達何か勘違いをしているようだけど、僕はただ内緒話をしに來ただけだよ」

「内緒話だと・・・？」

「そう、内緒話。受け取れ」

懷から出したのはファイルだった。

そしてファイルの中から10枚以上の紙が円を描くように出現した。

「三沢塾って進学予備校の名は知っているかな？」

「三沢塾・・・、シエアNo.1を誇るあの塾の事？」

「そこがどうかしたのか？」

「そこ・・・女の子が監禁されているから」

「監禁！？」

「どうやら今の三沢塾は、科学崇拜を軸にしたエセ宗教と化しているらしくてね。」

教えについては置いといて、その三沢塾が乗っ取られてしまった。

今度は真正銘本物の魔術師、正確にはチューリッヒ学派の錬金術師だがね。

その錬金術師の名はアウレオルス・イザードと言って3年前から行

方不明になっていた。

それが最近になってひょっこりと姿を表したと言っわけさ。」

「な・・・何のために？」

「それは、三沢塾に囚われていた吸血殺しさ」

「デープ・・・ブラッド？」

「その子が所有しているある生き物を殺す能力さ」

「ある生き物？」

「呼び方は色々あるけど・・・一般的によく知られている名は”吸血鬼”かな」

「吸血鬼！！？」

上条の頭の中には人間の生き血を喰らう怪物が浮かんだ。

「そんな化け物が本当に存在するのか？」

「僕達魔術師でさえはつきりとした詳細はつかめてない。

しかし吸血殺しとはその名の通り吸血鬼を殺す能力だ、なら先ず吸血鬼と出会わなければならない・・・

そのためには吸血殺しを取り押さえておくことにこしたことはないんじゃないかな？」

「何が言いたい？」

「僕はこれから三沢塾に特攻をかけて吸血殺しを回収する・・・
そうしないと不味い状況だからね。」

それから君達も一緒に来てもらう、申し訳ないけど拒否権はないと
思っただほうがいい」

「勝手な言い草だな・・・それはお前の都合なのだろう？
なぜ俺達が手伝いをしなければならない？」

「そうだ！なんで俺達がてめえに付き合わなきゃいけないんだよ！」

「一つだけ教えてあげるよ、君達が拒否すればインデックスは即回
収と言う事になる。」

必要悪の教会が下した役は君達2人にインデックスが裏切らないよ
うにするための足枷さ。」

つまり君達が従わないと足枷の意味はない」

「てめえ・・・それ本気で言ってるのか？」

「さあね・・・まあどっちにしろ僕について行くかついて行かな
いかは君達の自由だからね」

そう言うときスタイルはこの場を去っていった。

それと同時に人払いを解除した。

さっきまで姿形なかった人影も次々と現れた。

「くそ！！あの野郎、インデックスを何だと思ってやがる！！」

拳を強く握り締め、怒りをあらわにしながら呟いた。

「今は冷静になれ・・・、取り敢えずはあの子の安否だ」

「く……」

言われるがままに上条は怒りを堪え、インデックスを探すことにした。そして数十分探した結果一応インデックスを見つける事ができた。そして寮まで無事に着くことが出来た。

インデックスはスフィックスを諦めたかと思っていた上条であったが、結局彼女はスフィックスを隠していた。

また言い合いになったが、観念したのか上条はスフィックスを飼う事を承諾した。

そして適当に嘘を付いて2人は家から離れた、するとそこにはステイルがいた。

「何やってんだ？」

「あの子のためにイノケンティウスを置いていこうと思ってね」

どうやらインデックスを守るためにイノケンティウスを置いていくつもりようだ。

「僕達が三沢塾に行ってる間に他の魔術師が攻めてくるかもしれないしね

全く……世話が焼けるよ」

「お前……あいつのことが好きなのか？」

「な、ななな何を言ってるんだ！！あれは保護すべき存在であり、決して恋愛対象ではない……」

ステイルは顔を真っ赤にし焦りながら言った。

「とつとにかくさっさと行くぞ!!」

イタチと上条は何を焦っているのだから……と思いながらステイルについて行った。

「ここが三沢塾なのか？塾って言うからにはもっと小さい建物かと思っただけだ」

しばらく歩いて3人は三沢塾に到着した。
塾とはいえ高層ビルのような建物だった。

「しかしホントにここに吸血殺しがいるのか？
別に怪しくは見えないけど・・・」

「外見はな・・・だが建物自体が結界のようだ。
それもあり強力なやつのようなだ」

「その通りさ、この建物には錬金術師の結界が張られてるって訳さ」

「その錬金術師って強いのか？」

「アウレオルス・イザード・・・かのパラケルススの末裔さ
君達は錬金術師について何を知っている？」

「えーと、鉛を金に変えたり不老不死の薬を作り出すって奴か？」

「まあ・・・大体そんなもんさ。
だが錬金術師には本来究極の目的が存在する。
それは世界の全てをシュミレートする。

もし、頭の中で思い浮かべたものを現実世界に引つ張り出せるとしたら？」

「つまり・・・想像したことを何でも引つ張り出せるということか？」

「そんなの勝てるわけないだろ。」

「それじゃああれか？君はここで引き返すつもりかな？
手伝う気があるのなら今のうちに吸血殺しの顔でも覚えておくんだね。」

正直僕は東洋人の違いを見分けるのが苦手だけど」

そう言つてステイルは写真を2人に投げた。

見てみると、その写真には見覚えのある人物が写っていた。

「姫神秋沙、そう言う名前だそうだ」

写真を確認した2人はステイルについて行き、三沢塾に入り込んだ。中はいたつて普通で、学生などが行き来しているあたり怪しさはまるで感じられない。

「なんか・・・意外と普通だな」

「そりゃそうさ、今も予備校として営業中なんだからね」

「ふーんつて・・・なんだあれ？」

何かが目に止まった上条は近くによつてみた。

そこには血みどろなつた西洋の騎士を彷彿させるような物が置かれていた。

「これロボットだよな？」

「どうした？ここには何も無い、移動したほうが賢明だと思うがとは言つてもこれは君にとっては珍しいものかもね・・・」

「え？、ロボットなら科学サイドの領分だろ？」

「何を言つてゐる、これは死体だよ」

第八の巻 三沢塾（後書き）

こんな内容で完璧だと思っていた俺の姿はお笑いだったぜ。

第九の巻 錬金術師アウレオルス・イザード（前書き）

今回はちょっと自分のゴリ押しの理論が若干混ざってます。
それにしてもアウレオルスの口調は全然分らない。
正直これでいいのか・・・

第九の巻 錬金術師アウレオルス・イザード

「し……死体？」

いきなり死体だと言われても訳が分からなかった。
上条の顔からはそれが伺えた。

「恐らくローマ正教の13騎士団だろう。
この様子じゃ全滅みたいだけど……」

「な……なんでだよ」

「ここは戦場だ、死体の一つや二つ転がっていてもおかしくないの
だけど？」

「なんで……誰も気づかないんだ？」

「まあ……それは見てれば分かるよ……」

「?」

そう言った矢先、死体の隣を女子生徒が通り過ぎた。

普通なら大声で助け呼ぶか身体が石みたいに硬直するはずだが、
この生徒は全然気にしていない、いや……まるでこの死体が見え
ていないような感じだった。

「ど……どうなってやがる?なんで誰も騒ぎたてようとしない?」

彼の頭の中では何がどうなっているのか?と言う思念が右往左往し

ていた。

「表と裏だね・・・、表の住人である生徒達は裏の住人である僕達には気づいていない、そして僕たちも彼らに干渉することが出来ないのさ」

「結界が張られているのはこの建物だけなのか？」

「まあそうだろうね」

「なら話が早い・・・少しの間そこを動かないでもらおうか？」

イタチはそう言うのとまたま通りがかった女子生徒追って外に出た。

「一体・・・何をするつもりだろう？」

「さあね」

上条とステイルはただボーッと外で聞き込みをしているイタチを眺めていた。

そして20分くらいたったところでイタチが戻ってきた。
なにやら成果があったようだ。

「姫神とか言ったか？そいつの居場所が分かった。
ただそこにいるかどうかは分かんが・・・」

「えっ、つまりどういうことだよ？」

「そんな事も分からないのか？」

「そう言われましてもね・・・」

「ほーその手があったとはね」

ステイルは何が言いたいのか分かったようだ。

「表だの裏だの、それはこの空間だけの話。

一旦外に出ればそんなのは関係ないと言う事なんだろう？」

「まあ、そんな所だ。」

「それじゃ、案内してもらおうか。吸血殺しがいる場所に」

3人は女神がいる場所に向かって歩き出した。

やがて食堂の前を通りがあった。

「ふーん、科学宗教ってのは初めてだけど、いたって普通だね
僕はつきり教祖様の顔写真を貼って拝んでいるのかと思っていた
よ」

「確かに危険度は低そうだな」

「・・・おいここから早く離れるぞ」

険しい顔をしながらイタチは呟いた。

2人は最初は訳が分からなかったが、ステイルだけはすぐに理由が分かった。

前を見てみると生徒達が2人の事を不気味に見つめていたからだ。

「これはまずいかもね・・・」

苦笑いをしながらステイルが呟いた。

「えっ、ちよっ何がどうなっただ？」

「とぼけるなよ、表の住人であるあいつらが裏の住人である僕達が見えるはずがない」

「熾天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白、純白は浄化の証、証は行動の結果、結果は未来、未来は時間、時間は一律、一律は全て、全てを創るのは過去、過去は原因、原因は一つ、一つは罪、罪は人、人は罰を恐れ、恐れるは罪悪、罪悪とは己の中に、己の中に忌み嫌うべきものがあるならば、熾天の翼により己の罪を暴き内から弾け飛ぶべし」

生徒たちは一斉に提唱し始めた、時間が経つにつれて彼らの額から青白い球体がモヤモヤと出始めた。

「それでは写輪眼く・・・ってもう居ないし・・・。
まあ幻想殺し君、あとは頼んだよ。」

そう言うときステイルは上条を押しつけていちもくさんに逃げ去った。右手の力があれば何でも無効化出来るとふんだからである。

つまり上条があればほぼ鬼に金棒と言ってもいいからである。しかしそれはうまくいかなかった。
なぜなら上条も一緒に着いてきていたからである。

「おい逃げるな！！その右手の力はドラゴンブレスも防いだじゃないか！！」

君がいてこそ意味があるんだぞ！！

なのに背中を見せるなんてどうかしてるぞ!!」

「人を盾にしておいてよく言っぜ!! あんなもん右手だけで対処出来るかってんだ!!」

「しかしレプリカとはいえ、グレゴリオの聖歌隊を作り出すとはね」

「なんだよそのグレゴリオのなんとかってのは!!!!?」

「本来は333人の修道士を聖堂に配して、その祈りを集める大魔術だ」

「へっ、そんなもんまともにやって勝てる訳ねーだろ!!!
ていうかイタチさんはどこ行っただよ!!?」

「スサノオとかアマテラスがあれば何とかなるだろーに!!」

「そんなこと聞かれても困るね、僕が逃げたときにはとくに居なかったよ」

「なんだよそれ!!」

「でもまあそう悲観することもないさ、グレゴリオの聖歌隊は大勢の人間を同時に操らなければならない。

そのシンクロの鍵となっているものを破壊すれば・・・」

2人は逃げ続けていたがとうとう挟み撃ちになってしまった。

「・・・一つだけ秘策があると言えばあるんだけど・・・」

「あるんだったら早く使えよ!!」

「そうかい、なら遠慮なく使わせてもらおうよ」

そう言つとステイルは上条の肩を掴んだ。

「おい、切り札つてまさか……」

「その通り、君なのさ」

彼は上条を階段から突き落とした。

上条はバランスを崩さないように何とか下にたどり着いた。

「それじゃあ、後は任せたよ」

そう言つとスタイルは去つていった。

「何が任せただよー！あーもう不幸だあああー！……！……！」

一方上条達と別れたイタチは姫神が監禁されている場所を目指して行動していた。

「・・・ここもか」

しかし行く手には洗脳された生徒達が待ち構えていた。

「火遁・鳳仙火爪紅」

印を高速で結び、術を発動される前に炎を帯びた手裏剣で全員に攻撃をした。

手裏剣は的確に急所をつき、生徒達は倒れた。

「このままではきりがないな。
仕方がない、あれでも使つか・・・」

イタチは懷から札のような物を取り出し、チャクラを流し込んだ。すると武装した覆面軍団が出現した。

そして多数の覆面軍団は彼らに突っ込んでいった。

「ペインのよこした四象偶忍、本当に役に立つな
とりあえず後はこいつらに任せるとするか」

偶忍達が闘っている間にイタチはこの場を去った。

しかしどこへ行っても洗脳された生徒であふれかえっていた。

イタチは無視しようとしたが中々出来ないでいた。

ため息をした彼は刀を取り出し、片っ端から彼らの首を切り落としてった。

数分後周りには首なしの斬殺死体が大量に転がっていたり、大量の血が流れていった。

死体の生臭い臭い、イタチの立っている空間はまさに地獄絵図と化していた。

そこへステイルがやってきた。

「ちょ、そんな殺気じみた目で見つめるのはよしてくれないかな？」

ステイルは冷たい目で見つめるイタチに少しだけ身体が震えた。

普通じゃない殺気を感じ取ったからだ。

「しかし派手にやったね・・・」

彼らの首や死体がゴロゴロとしてやがる。」

「・・・・・・」

「それで、吸血殺しは見つかったのかい？」

「・・・これから向かうところだ」

「そうかい、それじゃさっさと彼女を奪還しないとね。」

一応核となるものは破壊しておいたしね。

それにしてもあの錬金術師も歪んだものだ。

血路とは自分で切り開いていくものだろうに・・・」

「・・・」

2人がこの場を去ろうとしたとき、誰かの気配を感じ取った。

「当然。侵入者は3人だったはずだが？」

現然。貴様の使い魔はグレゴリオレプリカにのまれたか？」

暗闇から現れたのは緑色のオールバックの男だった。

「生憎だけど、あいつはかなりしぶといんでね」

「・・・誰だあいつは？」

「こいつこそ、錬金術師のアウレオルス・イザードさ」

「・・・こいつがか」

「それで？僕達に何のようだい、錬金術師」

「ちくしょうめ!! 一体どうすれば!!」

ステイルとはぐれた上条は青白い球体を消しながらただただ逃げ回っていた。

しかし炎はそれを許さないかのように彼を取り囲んだ。

「くっ! 囲まれた。もう・・・ダメなのか・・・」

彼は目をつぶった、覚悟を決めたように。

しばらく目をつぶったまま静寂が続いた。

再び目を開くとさっきまでイナゴの大群の様に襲いかかってきた青白い球体が嘘のように消え去っていた。

ステイルが核を破壊したからだろう。

「球体が・・・た・・・助かったのか?」

上条はその場に座り込んだ。

さっきまで恐怖に支配されていたがすぐに安堵に変わったからである。

「全く・・・人をおとりにしやがって。
後で覚えてやがれ!!」

静寂と化した空間で彼は叫んだ。
拳を強く握り締めながら。

そこへ、

「あなた。そこで何やってるの？」

吸血殺しこと姫神がやってきた。

「お前・・・よかった。これでミッションクリアだ。
さあさつさと帰ろうぜ。」

「帰る？」

「そうだよ。こんな所に閉じ込められてないでさつさと外へ出ようぜ」

「私目的がある。だからここから出るわけにはいかない。
なぜならここではなくてはいけない。いや錬金術師がいないと出来ない事があるから。」

「けどさ、仲間だったら監禁して立てこもったりしないだろ普通」

「それはアウレオルスに占拠される前。

私が外に出ないのは必要性を感じないだけ

不用意に外に出るとあれを呼び寄せてしまうから」

「じゃあお前、吸血鬼に見つかりたくないからこんな所に引きこもっているのか？」

「吸血鬼・・・貴方はどんな生き物が知ってる？」

突然質問された上条は何も口に出せなかった。

自分の知ってることをありのまま伝えようとしたが、雰囲気的に絶対そうでないからだ。

ならばどうなのか、彼は答えが見つからなかった。

「変わらない。私達と同じ

誰かのために笑い。行動できる

そんな人達

けど私の血はそんな人達を甘い臭いで呼び寄せてしまう

そして呼びせた後に殺す。

でも理由はない。理由はないけど殺し尽くしてしまう

ここ学園都市は力を扱う場所だから。これの秘密が分かると思ってた秘密が分かれば取り除く方法もあると・・・

だけどそんなものはどこにもなかった・・・

私は1人として絶対に殺したくない

誰かを殺すぐらいなら。私自身を殺すと決めたから」

同じく無表情だが姫神からは悲しそうな空気が感じ取れた。

一通り聞いた上条は立ち上がり

「なあ1つだけいいか？

吸血鬼を殺したくないのならなぜファミレスで食いだおれていたんだ？」

「簡単。アウレオルスが吸血鬼を欲しているから

私がここになると吸血鬼を呼べないから」

「ちょっと待て、それじゃあさっき言ったこととは全くの正反對じゃないか」

「アウレオルスは約束した。吸血鬼は絶対殺さないって

アウレオルスは言った。助けたい人がいるって
助けるために吸血鬼の力が必要なんだって
その人を助けるためにこの力を使いたいって」

「そんなのダメだ。

もしそいつがお前の言う通りの人間だとしたら、これ以上間違えさせるわけにはいかない。

これ以上進ませたら本当に取り返しのつかない事」

「必然。私のどこが取り返しのつかないと言うのだ？」

「えっ!？」

いきなり声がしたので振り向いてみたらアウレオルスがこちらに向かって歩いてきていた。

「あ・・・あいつが・・・」

「うん。」

「完然。仔細無い、すぐそちらに向かおう」

そう言い終えた瞬間、アウレオルスはいきなり上条の目の前に現れた。

いきなりの出来事に彼は驚きが隠せなかった。

「当然。疑問は湧いて出るだろうが答える義務なし」

「!!!!!!て・・・てめえ!!!!」

上条は拳を強く握り締め、アウレオルス目掛けて右ストレートを叩き込もうとした。

しかしアウレオルスは全く動じることもなく

「これ以上先貴様はこちらへ来るな」

「なっ!!」

もう少しでパンチが届く所だったが、なぜか当たらなかった。周りを見てみると、さっきまで平面だったはずの床がなぜか急な坂になっていた。

「な・・・なんで」

「無然。つまらんな少年よ・・・
砕け散れ」

「待って!!」

砕け散れと言おうとした瞬間姫神が両者の間に入った。

「ば、馬鹿やろう!!・・・!!」

・・・吸血殺しは吸血鬼を殺せるほどの力・・・ならば

しかしアウレオルスはこれを見越していたようであり、

「結局貴様は最後の最後で吸血殺しにすぎり、頼り、願った
どうだね、どこか違っている所があるとでも？」

思っていたことをズケズケと言い当てられた上条はただ舌打ちすることしか出来なかった。

「そんな事はない。この人は吸血殺しの意味を知らなかった

ここに来たのは今日知り合った私を助けるためだけの事

アウレオルス・イザード。あなたの目的は何？

ただの一般人を殺して楽しむことがあなたの望み？

もしそうだというのなら私は降りる

私にも慕う神。自らの命を絶つ選択権はある」

「・・・必然。こんな所で時間をさく余裕も無し」

「！！！！」

「少年、案ずるな殺しはしない」

そう言うのアウレオルスは口を上に取り上げながら懷に手をいれた。
そして金属の針のような物で突然首を刺した。

「ここで起きたことは全て忘れる」

「!!!!」

気がついたらなんの変哲もない公園のベンチに座っていた。
隣にはステイルが煙草を吸いながらよっかかっていた。

「……………ここは？」

「君がいると言う事は日本に違いないだろう
しかし…………何か重要なことを忘れているような…………」

「重要なこと…………そうだ、イタチさんは？」

「さあね気づいたときには彼はもういなかったよ」

「そうか…………でもまだ何か忘れているような…………」

「まだあるのかい？まあどうせ、思い出すほど価値のないものなん
だろうけどさ」

「……………そうなのか…………な」

そう言いながら上条は自然と右手で頭をかき回そうとした。
右手が頭に触れた瞬間、

全て忘れる……

この言葉と共に失われた記憶が一気に蘇ってきた。
全てを思い出した上条は立ち上がった。

「お前の疑問をさつくりと解消するおまじないをしてやる」

「ん？東洋の呪いは神裂の専門なんだ
彼女に聞くよ」

「そう硬いこと言わずに、目をつぶってみなって」

「……」

ステイルは言われた通り目をつぶった。

「よくも人様をおとりにしやがったな！！！！」

上条は叫びながら渾身の右ストレイクでステイルの頭を殴った。

「何しやが……」

幻想殺しを宿す右手に殴られたステイルは忘れていたことを全て思い出した。

「日本では記憶を取り戻すには頭に強い衝撃を与えるのかい？」

「まあ、そういう事」

上条は笑いながらステイルを起こした。

その後2人はすぐに公園を出た。

その途中あるものに気づいた。

それは公園の近くあった小さな木にくっついていたイタチだった。

「遅かったな」

「こんな非常事態に何やってんだか君は・・・」

「それは置いて、何か忘れていないのかよ？」

「何の事だ？これからあそこに行くんじゃないのか？」

「その様子だと何も忘れていないみたいだね・・・」

黄金鍊成による記憶抹消をどうやって防いだ？」

「防いでなどない・・・」

お前達と行動し、やられたのは俺の分身だ

何も知らずに敵とやりあうなどどうかしてるからな」

「・・・分身ね。で何か掴めたのかな？」

「一応はな」

「まあそれは行く途中でゆっくり聞くとしようか」

取り敢えず準備が整った3人は姫神を奪還すべく再び三沢塾目指して動き出した。

入口の近くまで着いた一旦ここで足を止めた。
なぜなら入口の前に騎士団が整列していたからだ。

「おい、あいつら入口にいた・・・」

「13騎士団の生き残りか・・・、少し様子を見るとしよう」

3人は木陰に隠れながら彼らの様子を伺っていた。

しばらくして中心にいた小隊長らしき人物がいきなり剣を抜き出し、それを上に掲げた。

それにつられて他の騎士達も剣を上に掲げた。

すると剣先が赤色に強く光り出した。

「グレゴリオ・クアイア・・・、真の聖歌隊か」

「えっ？ちよつと待てよ、グレゴリオの何とかには大勢の人々が必要なんじゃ・・・」

「今頃バチカン大聖堂では3333人の修道士が祈りを捧げているんだろっ」

「ヨハネ黙示録第八章第七節より抜粋、第一の御使、その手に持つ滅びの管楽器の音をここに再現せよ！！！！」

辺り一帯にラッパのような音が響いた。

「あいつら、一体何する気なんだ！！！？」

「爆撃さ」

「何だって！！あの中には姫神が、無関係の生徒たちがいるんだぞ！！！！」

天上から現れた巨大な光の柱は三沢塾のビルに直撃した。そしてそれに続くように容赦なく崩壊が始まっていった。

「まずい！！このままじゃ押しつぶされるぞ！！！！」

このままでは危険と判断したステイルとイタチはこの場を去ろうとした。

しかし上条はそんな事関係なしに走る。

「おい！！何やってんだ！！巻き込まれるぞ！！！！」

「うるせえ！！！！だからと言ってこのまま見捨てられるかよ！！！！」

呼び止めたが全く聞き耳を持たないようだ。

そして粉塵の中に走っていった。

だがやはり迷い込んでしまった。

「?????・・・う、うああああ！！！！！！」

崩壊が始まっているビルから落下した巨大で複数の瓦礫は、それを待っていましたかのように

一斉に彼目掛けて降ってきた。

「火遁・豪龍火の術」

僅か数メートルちよつと言う所で、龍の頭の形をした巨大な火球が瓦礫をのみ込んだ。

その衝撃で瓦礫を一気に吹き飛ばした。

僅かのスキにイタチは上条を抱えてその場を脱出した。

「・・・全く世話の焼ける奴だ・・・」

無表情とは言え、少し呆れていたようだった。

上条は犬のように唸りながら下を見下ろしていた。

そして離れたところにいたステイルの所に降り立った。

「全く・・・君は一体なにをやってんだか。」

崩壊途中のビルに突っ込むなんてどうかして」

突如異変が起きた。

崩壊が続いていたビルが止まったのだ。

3人は辺りの時間が止まったのかと錯覚を起こした。

しかし止まったのはビルの崩壊のみ、そしてテープの巻き戻しのようにビルが復元されていた。

しばらくして崩壊が始まっていた三沢塾は何事もなかったかのようにそこに建っていた。

「これが・・・」

ステイル口から煙草が落ちた。

「アウレオルスの・・・黄金錬成の力・・・」

第九の巻 錬金術師アウレオルス・イザード（後書き）

次がVSアウレ何ですが・・・どう闘わせるかについてが全くおもいつかない・・・

奪還屋やDBだったらいくらでも思いつくんだけどなあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7665w/>

とある幻想殺しと万華鏡写輪眼

2011年11月17日21時38分発行